

---

# モンスターハンター～銀の牙の運命～

銀河

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

モンスターハンター～銀の牙の運命～

### 【Nコード】

N1702W

### 【作者名】

銀河

### 【あらすじ】

暗殺、密輸、情報収集etc・・・文字通りのなんでも屋<不知火屋>を営む不知火家の次男である不知火銀牙は15歳の誕生日に1人前になったら受け継ぐ家宝の銀のネックレスをもらう。しかしそれは異世界にひきずり込むといういわくつき。そして起きたらそこはモンスターハンターの世界。果たして銀牙はどうなる？

## **第1話 銀色のネックレスによって導かれる運命。 (前書き)**

初投稿です。若輩者ですが最後までお付き合いいただけると光栄です。

## 第1話 銀色のネックレスによって導かれる運命。

俺の名は不知火銀牙。

なんでも屋<不知火屋>を営む不知火家の次男である。

なんでも屋といっても便利屋みたいなのは違うぞ。

暗殺、密輸、情報収集、etc・・・。

文字通り<なんでも>屋である。

そんなこともあって<不知火屋>を継ぐために、俺は幼少の頃から厳しい修行という名のいじめを受けている。

現在は昼間は中学3年生として、夜は不知火屋のスタッフとして働いている。

例外として仕事で1週間以上海外にいたりすることもあるから、出席日数とか危ないと思いきや、俺の祖父である人、俺はじじいと呼んでいる人が電話一本で解決してくれる。

その後、なにをしたのか知らんが学校に行くと校長やら教頭やらがこびへつらってくるのがうざいかな。

そのせいでみんな気味悪がって友達なんてできやしない。別にいらんだけだね。

話を戻すが実はこの人が俺の二人の師匠の内の一人である。

もう一人はだれだて？決まってる。

俺のクソ親父だよ。

じじいは孫かわいさにひどいことはせず、銃の練習とか>力<の知識を教えてくれる。

<力>についてはいずれ話すであろう。

反対にクソ親父は非人道的なことばかりしてくる。

毒の耐性つけるために、1歳の頃から飯に致死ぎりぎりの毒を混ぜたり、1ヶ月以上水だけで生活させられたり、太平洋のど真ん中の小島に置き去りしたりいいだしたらきりがない。

でもこのアメとムチによって元々才能もあった俺は中学3年生にし

て1人前のなんでも屋になったのさ。

まあ、じじい達に頭が上げられないことはかわりないのだけだな。

今日は15歳の誕生日。

といっても友人を呼んで盛大にパーティを開いたりするわけでもなく(そもそも友達いないし)、基本的にじじい達が<プレゼント>をくれるだけだな。

去年は親父の愛刀「雷切」、一昨年はじじいの愛銃のライフル「音越」をくれた。

普通に考えたら銃弾は音より速いっていうっこみはなしだ。今年は大方新しい仕込み銃とかじゃないかと思ってる。

今日は仕事はないので学校にいったが授業はもちろん上の空である。さっさと家にかえるとクソ親父に

「夕食の後に毎年恒例のプレゼントをやる。」  
と、いわれた。

夕食が非常に待ちどおしい。

そして一般人は一生見れないようないつものどろりな豪華な夕食の後、じじいの部屋にこいと言われた。

鼻唄を歌いながらじじいの部屋に行く。

これでプレゼントじゃなかったら元じじいの愛銃「音越」で頭撃ち抜いてやろう。

じじいの部屋に入るとクソ親父もいた。

机を挟んで反対側に二人が立っている。

そして机の上には小さな箱が乗っている。

おそらくそれが<プレゼント>だろう

しかし、じじい達は何も言わない。

沈黙に耐え切れず俺が口を開こうとすると、

「俺はまだ早いと思うが、一人前になった以上、これを引き継いで

もらう。開けてみる。」

クソ親父がいう。

小箱を開けると中には銀色に光る大きな玉のついたネックレスが入っていた。

「誕生日プレゼントはこれか？」

「ああそうだ。これは不知火家の家宝だ。」

「見たところただのネックレスだが？」

「これは異世界の宝だ。」

「はあ!？」

「くわしいことは俺も知らん。」

「この所持者はその世界にひきずり込まれるといわれているのじや。」

「なんだよそれ!？」

「静かにしろ。俺は親父からいわれたことを伝えているだけだ。」

「ワシはワシの親父からいわれたこと伝えているだけじゃ。」

「・・・。」

「心配するなワシもコイツもそんな目にあってはおらん。」

「ただ所持者の息子が一人前になったら渡していくと決められているのだ。」

「はじめからそういえよ・・・」

「ただ・・・」

「?」

「歴代最高の才能があるものはこの宝に認められるともいわれている。」

「なら俺は少なくとも大丈夫だろ。な?」

すると、非常に渋い顔をして、

「ワシがこれを継いだのが30歳ぐらいだったかのう。」

「俺が継いだのが25だ。」

「はあ!？」

そりゃ驚くさ。

「俺のほうが才能あるってこと？」

「ああ。だから伝承が現実にならないかと危惧している。」

「ちっ」

じじいの部屋からでて、自分の部屋に帰るとつい舌打ちしてしまった。

「異世界にひきずり込むなんてあるわけないだろ。」  
そうつぶやく。

しかしじじい達は真剣だった。

それを俺には無視することはできなかった。

「なんにも準備しないのは心細いからな。準備して損はない。」  
自分にいきかせるようにいい、準備をはじめた。  
意外と俺は迷信深いんだよ。

とりあえず携帯食料、水、最低限のサバイバルアイテムを持った。

そして防刃のための鎖帷子を着込み、その上から耐熱防弾チョッキを着て、銀色の皮ジャンを羽織る。

ちなみに皮ジャンはただの趣味である。

とどめに耐電ブーツを履く。

「これでばっちりさ」

しかしここで自分の愚かさにきづく。

「いつ異世界にいくなんてわからないじゃん・・・それにそもそも異世界とやらに持ってけるかもわからないし・・・」

自分がほんとせっかちであることを痛感した。  
うなだれて皮ジャンを脱ごうとするが、

「でも寝ているうちにひきずり込まれるかも・・・」  
考えるとどんどん悪い方向にいつてしまう。  
するとネックレスが一瞬光った気がする。

「チキシヨーもうなんでもこいやぁー」

半狂乱になりながらそう叫んだ。

そしてそのまま布団に突っ込み早めの就寝についた。

ネックレスの光が一層高まっていることには気づいていなかった・・・。

チュンチュンチュン

小鳥のさえずりが聞こえる。

コポコポコポ

沢が近くにあるみたいだ。

ザワザワザワ

木と風がぶつかる音がする。

いいねえ老後はこんな環境のいいところに住みたいよ。

うん・・・。

ぶっちゃけもう起きてるよ。

現実逃避というやつさ。

・・・。

「異世界きちまったよ（笑）」



**第1話 銀色のネックレスによって導かれる運命。 (後書き)**

いかがでしょうか。と、いってもまだたいしたことしてませんが  
(笑)

初心者ゆえ誤字脱字は見逃してくださいorz

## 第2話 運命の出逢い。女の子と謎のモンスター（前書き）

勢いで書いた第2話です。＜力＞についても説明します。

## 第2話 運命の出会い。女の子と謎のモンスター

アハハハハハハハ。

ウフフフフフフ。

ここはどこ？

ぼくはだれ？

アハハハハハハハ。

・・・・・・

落ち着け俺。

危ない危ない。

自分を見失うところだった。

俺、不知火銀牙はとても困惑している。

起きたら大自然の中なんだから。

「さて、ここはどんな世界なんだろう。」

・・・・

そうですよ。

開き直りましたよ。

認めますよ。

ここは異世界ですよ。

首にかけているこの銀のネックレスのせいだろ。

あれ？

俺首にかけて寝たっけ？

・・・・

とりあえずここがどんな世界なのか確かめなくちゃいけないな。

今までと変わらない平和な世界なのだろうか。

それともメ○ゾーマとかホイ○とか唱えたりできるのだろうか。

フフフそれなら来たかがあるかもしれないな。

・・・最悪人がいなかったり、野蠻人の世界かもしれないがな。

考えてもしようがない。

とりあえず歩きまわってみるか。  
よいしょ。

あ、今さらだけど荷物は全部もってこれたみたいだな。

（散策中）

ギョルルルル

・・・

腹が減ったな。

携帯食料はなるべく使わないほうがいいよな。

なんか調達できないかな。

おっ。

キノコが生えてる。

明らかな毒キノコもあるけど俺は耐性があるから一応食える。

最後の手段だな。

あっ。

川には魚がいっぱいいるぞ。

ドッポーン

よっしゃーなんかでかいアロワナみたいのがとれたぜ。

これをキノコといっしょにアルミに包んで、地面に穴を掘って入れる。

そして枯れ木や枯れ葉を入れてメタルマッチで火をつければ蒸し焼きができるのさ。

そーれ。

チィン

ボッ

無事火がついた。

焼き加減いまいちわからんから心配だな。

匂いをかぐために鼻を近づける。

すると・・・。

ボン

「ギィヤアアアアア。」

俺の悲鳴が響きわたる。

どうやらアロワナ自体が爆発したようだ。

おかげで髪は焦げたし、顔はすすだらけ。

キノコも木っ端微塵になっちまった。

携帯食料を食うしかないのか？

と、思ったとき、

「キャアアアアアア。」

女の悲鳴が聞こえた。

とりあえず人はいるみたいだな。

冷静に考えていないでとりあえず行ってみようか。

く???く

「はあっ」

右手にもつ片手剣で目の前の敵を斬りふせる。

ガキンザクツ

ガキンザクツ

襲いかかる敵の攻撃を左手の盾でガードして叩き落とし、斬りつける。

「ちっ、きりがないよ。」

すでに5体は倒した。

しかし敵はどこからか知らないけどどうようわいてくる。

引くべきかな？

しかしどうやって？

そんなことを考えていると隙ができるのは当然である。

ギァアギァア

左からきた攻撃を上手くないなせず、衝撃をそのまま吸収してしまう。

「ぐっ！」

腕が痺れてきた。

もう左手は使い物にならない。

すると、いつせいに敵が襲いかかってきた。

「キヤアアアアアア。」

く銀牙く

「なんじゃありゃ。」

おもわず口にだしてしまう。

紫色の、でっかいトカゲが、女の子を襲ってる。  
なに？

そういうかんじですか？

この世界。

うわーめんどくせー。

化け物と人間が戦うかんじ？

いやそんなこといってないで助けないと。

「不知火流抜刀術＜一閃斬＞」

ケケケあわれ、女の子に乗っていたトカゲはみんな上半身と下半身が真っ二つにわかれた。

案外軟らかいな。

技をだすほどじゃなかったか。

ギヤアギヤア

げっ。

新手がきやがった。

ここは逃げるか？

と、思ったが女の子は気絶している。

そりゃそうだろう。

目の前で複数の化け物が真っ二つになり血やらなにやらが降り注い

だんだもの。

「ちっ、めんどくせえええ。」

修羅道ON

「ほわたたたたたあ!!!」

トカゲ共の思考がとまる。

そして気づく。

コイツやばい。

殺られる。

とな。

でも俺は止まってやらない。

「死にさらせい。クソトカゲえええ。」

「????」

僕は見た。

基本エサである人間が、素手で足で仲間をちぎっていくのを。  
全員死を覚悟したであろう。

しかし、ひくことはできない。

逃げてもおそらくコイツは追ってくるであろう。

コイツをここで殺すしかないんだ。

死にたくない死にたくない。

ただそれだけで化け物にとびかかりー

ドシュッ

そこで思考はとまった。

「銀牙」

「見せ掛けだけか。楽勝だったな。ハハハ。」  
はい。

質問に答えよう。

修羅道というのは六道輪廻の1つである。

前に<力>っていったやつさ。

じじいいわく不知火家は六道のそれぞれの王と友好的な関係にあり、適性があればその力を得ることができそうさ。

普通は1つ。

多くても3つしか得られないらしい。

で、俺は4つ。

地獄道、畜生道、修羅道、人間道の4つである。

地獄道は幻覚を見せることができる。

すなわち精神攻撃である。

俺は適性度が低いのでせいぜい一瞬幻覚を見せる程度である。

畜生道は人を死に至らしめるモノの召喚。

さっきのは雷切を手元に召喚して斬ったのさ。

修羅道は格闘スキルの向上。

これはかなり適性が高く、トカゲの動きが止まって見えるぐらいさ。そのかわりかなぜか武器を使えないっていう制約があるんだけどね。あくまでも格闘だけということさ。

人間道は身体能力の強化。

修羅道とは微妙に違うぞ。

これは基本的な筋力とかの他に視力や聴力とかもを強化できるのさ。ちなみに俺は使えないが餓鬼道と天界道ってのがある。

この二つはセットみたいなもので、天界道はマインドコントロール、餓鬼道は乗っ取った相手の能力を使いこなすことができる。

じじいはこれを使えるんだな。

ほんと恐ろしいスキルだよな。

さて、説明は終わりだ。



これからどうしよう。

女の子が起きるのを待つか。

あ、こいつ怪我してんな。

介抱してやらんとな。

ゴソゴソ

心苦しいが女の子の荷物をあさる。

一応俺は救急セットは持つてるけど使わないに越したことはないかな。

おや？

地図だ。

ほうほう・・・。

このしょぼい地図からするとここはエリア6ということだな。

とりあえず家のマークがあるところについてみよう。

タッタッタッタ・・・

それを終始見ていた者がいたことは誰も知らない・・・

## 第2話 運命の出逢い。女の子と謎のモンスター（後書き）

いかがでしたか？予定としては目覚めた女の子と村に行くかんじです。ベタですねえ。

感想等お待ちしております。

改正 あるトカゲを？？？にしました。題名を変更しました。最後に1行足しました。

### 第3話 妄想大爆発（前書き）

今回は女の子視点だけです。後、銀牙のキャラが若干違います。他人（知り合い以外）がいるときでは紳士モードになると考えてください。

### 第3話 妄想大爆発

「????」

「うっ、うん・・・」

気づいたらそこは見慣れたベースキャンプだった。  
すでに辺りは暗くなり始めている。

（あれ？たしかわたしはジャギイと戦って、それで囲まれて・・・）  
ジャギイというのは鳥竜族に属するモンスターで、群れで狩りをする肉食のモンスターである。

（そうだ。ジャギイにのしかかれてもうだめだと思ったら、血が  
いっぱい降り注いできて・・・）  
そこからの記憶がない。

（気絶しちゃってだれかが助けてくれたみたいね。）  
そこまで考えてから自分の置かれている状況に気づく。

「ひゃあっ！！！」

あるべきものがないのだ。

ハンターになってからもう半年もたった。

そのうちの半分の時間、自分を守ってくれた防具ハンターシリーズ  
がないのだ。

残るはインナーだけ。

処置のために脱がしたのだろうが、さすがに恥ずかしい。

あわてて立ち上がろうとするが、そこで左腕が包帯で巻かれている  
ことに気づく。

（痛っ・・・それにしても・・・）

完璧な処置が施されている左腕を凝視する。

ここまでの医療技術を持つ者はハンターではそうそういないと思う。

しかしジャギイを倒したということはやはりハンターなのだろう。おそらく助けてくれた人のハンターとしての腕前も相当なものだろう。

ベッドから立ち上がると、外にハンターシリーズが干してあった。助けてくれた上に血まみれの防具を洗ってくれたようだ。

ここで1つの考えが浮かぶ。

（寝ている女の子の服（防具）を脱がして、それを洗うとは！？）  
ボン

真っ赤な顔から煙があがる。

（もうお嫁にいけないじゃない・・・）

本人は気づいていないが彼女は重度の妄想癖があるのだ。

（あっ、でも男とは限らないじゃない。）  
すると背後で物音がした。

（ひい！！！！）

「おっ、気づいたか。腕は大丈夫か？」  
男だった。

「あなたは何者ですか？」

「・・・質問に質問でかえすなよな・・・まあいいや。俺は不知火銀牙。腕は大丈夫か？」

「シラヌイギンガ？」

そんな発音の名前など聞いたこともない。

それにこの男のいでたちは実に奇妙である。

黒い髪、黒い目、中途半端な色の肌。

そんな人間聞いたこともない。

それに銀色のモンスターの皮でできた、服のような防具。工房のリストにこんなものはなかったはずだ。

見たところ武器は持っていない。

「・・・う・で・は・だ・い・じょ・う・ぶ・か？」

ここでようやく自分が失礼極まりないことをしてることに気づく。

「だ、大丈夫です。手当てしてくれたんですね。ありがとうございます」

ます。」

「いやいや。大事に至らなくてよかったよ。」

男は最高の笑顔を見せる。

(ちょー!!! なにこの破壊力抜群の笑顔は!!!!)

警戒心は一瞬でふきとんだ。

「顔が赤いぞ? 熱でもあるのか?」

「ふえええ!!!!、いえ、大丈夫です!!!!」

「そう?」

男は怪訝そうな顔をするが、それ以上追求してこなかった。

「(いい人じゃない。) シラヌイさん? あなたはどうしてこんなところにいるんですか?」

いでたちはどうでもいい。

それが一番の疑問だ。

「銀牙って呼んでくれ。ギンガシラヌイって名乗るべきだったか。・

・俺はただの旅人さ。」

「そうですか・・・」

一瞬もったのが気になるが聞かないでおこう。

「ギンガさん。ここは認められたハンター以外立ち入り禁止ですよ。」

「

最初は密猟者かとも思ったが、この人に限ってそれはないだろう。

「ハンター??? ってなに?」

(!!!!)

驚きである。

ギンガという男はハンターという職業を知らないらしい。

「ハンターを知らないんですか!? ハンターとはモンスターを狩る職業ですよ! あなたいったいどこから来たんですか?」

ごもつともである。

この時代、ハンターがいなければ生きていけるはずもない。

「・・・ああ。俺の住んでいたところはさっきのやつらみたいなのがないんだ。」

「モンスターがない!？」

たしかにモンスターがない場所は存在する。

しかし、そこは同時に人が住むには適さないということの意味する。いったいどんな人生を歩んできたのであろう。

「・・・聞きたいことはいろいろありますが、とりあえずわたしの住んでる村に来ませんか? 旅人なんでしょう? (お礼もしたいしね。)」

「いいのか? じゃあ御厄介になるよ。」

ギンガはまた笑顔をみせる。

(!!!! だからなんなのよこの笑顔は!!!!)

おもわず顔を背ける。

また顔が真っ赤になる。

「やっぱり熱があるんじゃないのか?」

ギンガは心配そうに聞いてくる。

大丈夫、というとして振り向くと目の前にギンガはいた。そしてわたしとギンガのおでこが触れる。

「!!!!!!」

声にならない悲鳴をあげる。

「やっぱり熱はないみたいだな。体質とかか?」

無神経にそう聞いてくる。

「ギンガさんのほかあああああ!」

おもわずおもいきり突き飛ばしてしまった。

あ。

このベースキャンプは断崖絶壁の上に造られている。

わたしは崖の内側に。

ギンガはわたしよりも外側に。

ギンガが落ちていく姿がスローモーションになって見えた。

ギンガは最期まで笑ってた。

まるで大丈夫とでもいうかのように。

・・・・・・何時間経っただろうか。

実際は数十秒でしかないと思うが、わたしにはそれくらいに長く感じた。

その気があったわけではないとはいえ人を殺してしまった。

しかも命の恩人を。

思い返せば怪我を手当てしてくれたことはお礼をいったが、命を助けてもらったことに対してはまだなにもいつてない。

（わたしはなんてことを・・・いやわたしは悪くない。無神経なギンガさんが悪い。）

頭の中で必死に正当化させようとするが、そんな自分に嫌悪感を抱く。

（わたしは、わたしは、わたしはああああああ）

その場に泣き崩れる。

（見た目は変だったけど優しいひとだった。そんな人の未来をわたしは奪ってしまった。わたしは最低だああああ）

そこまで考えてから新たな考えが浮かぶ。

（もしかしたら下が川で生きているかも。いや途中で引っかかっているかも・・・）

そんな絶望的な確立のシチュレーションが思い浮かぶ。

しかしギンガが死んでいたらと思うと崖下を覗き込むことできない。

（もしも生きていたら、このまま去ったら見殺しにしたことになる。そんなのいやだ。わたしは責任を持たなければならない。）

心を決めて下を覗き込む。

しかし誰もいない。

川もない。

ただの岩場が見える。

あそこに落ちたらまず助からないだろう。

（いったいどこへ!?）

そう考えたとき、背後から強風が吹いた。

（えっ!!!）

ゆっくりと体が傾いていく。



崖下に向かって。

（ギンガもこういう感じだったんだろうな。）

冷静に考えている自分がいる。

（これでギンガさんにしたことを少しは償えるかな。）

そう考えたとき、落ちかけていたわたしは強い力で引っ張られ、引き上げられた。

そこには今しがた殺してしまったはずのギンガがいた。

「まったく、俺を殺すき」「ギンガさん！！！」・・・」

問答無用で泣きながら抱きついた。

生きてた。

どうして生きてたかなんてどうでもいい。

「ごめんなさいごめんなさい。」

ギンガの胸の中でひたすら謝った。

「そ、そんな謝らなくてもいいでしょ。ね、ね、ね。気にしてないからさ。」

ギンガは殺されかけたというのに気にしないという。  
なんと心の広い人なんだろう。

「でもわたしはそんな恩しらずな女ではありません。」

「いやだから、あれくらいなんとも「だめです。」はい・・・」

「わたしに恩返しをさせてください。」

「わかったわかった。わかったからとりあえず落ち着こうね、ね。ようやく自分が興奮していることに気づいた。」

「とりあえず君の村にいいよう。そういう話だったでしょ。」  
そうだった。

「そうですね。そろそろ迎えが来るはずですよ。少しまってください。」

「ああ、わかったよ」

そういってギンガはベッドに腰を降ろす。

そのすぐ横にわたしも腰を降ろす。

そしてギンガの左手に抱きつく。

「ねえ・・・」

そういつてギンガは苦笑する。

「いいじゃないですか。減るもんじゃないですし。」

「・・・・・・・・」

この桃色の空気を遠くで眺めているものがいた。

荷車をひいている温和な性質のモンスター<ガーグア>とその上に座る1匹の猫。

人の言葉をしゃべり、人の社会で働く獣人族と呼ばれるモンスター<アイル>。

「まったくじゃあ・・・こんな空気のにゃかどうやってはいつていけばいいのにゃ・・・」

今日一番の被害者は彼かもしれない。

もうすでに辺りは暗くなり満月が2人を照らしていた・・・。

### 第3話 妄想大爆発（後書き）

一応言っときます。紳士モードの銀牙ですがほとんど本音ですよ。  
一人前の不知火とはいえまだ中学三年生ですからね。  
感想等お待ちしております。

#### 第4話 ようこそユクモ村（前書き）

少しいっつもより長めです。駄文ですがお付き合いください。



（ベットが1つしかなかったからどっちが地面で寝るかと譲り合い合戦した後の妥協案だけどね。）

思春期の男子としてどうなんだろう？

「えっ、あれ？そうでしたっけ？ごめんなさい。わたしはレイラⅡジュⅡスカーレットといいます。15歳です。レイラって呼んでください。」

屈託のない笑顔でいつてくる。

・・・こんな人に嘘をついている自分が恥ずかしい。でもいったて信じられるはずがないけどね。

異世界から来たとか、輪廻とか。

「俺も15歳だよ。同じ年だったんだね。」

笑顔でいつてあげる。

無愛想に返すなんて俺にはできない。

すると彼女ーレイラの顔が赤くなる。

理由は聞かないことにする。

もう殺されかけたくないからな。

「まったく、いちゃいちゃしすぎだにゃ・・・」

運び車を操るアイルーの独り言がきこえてくる。

そんなつもりはないんだけどな。

でもレイラは可愛いし、向こうも俺に対する警戒心がなくなったからそう見えるのかもしれない。

でも妄想癖があるのが玉に傷なんだよねー。

ちなみになぜ俺がそれを知っているのかというと昨日崖から落ちた後の心情やその後いろいろな話を聞かせてくれた。

この世界の常識とかも含めていろいろ。

俺は外と交流のない田舎の小さな村の出身ということにしておいた。そうしておいたほうが都合がいい。

服とか容姿とか。

黒髪、黒い目をした人はまったくおらず、肌はみんな白いらしい。服は防具ということにしておいた。

皮製のそれに見えるらしい。  
持ってきた荷物をいろいろ見せたが、ほとんど見たこともないといわれた。

携帯食料だけはこちらにもあるそうだ。

レイラいわくすぐまずいらしいが。

文化が違うというのはいろいろ大変だなあ。

おっと、なにか見えてきたぞ。

「あれがわたしの村です。」

・・・田舎ってかんじだな。

周りを山で囲まれて、その真ん中ある。

でも予想よりかなりでかい。

「想像していたより大きいでしょう？」

素直にうなづく。

「わたしの村はですねえ、温泉っていうお湯が湧き出る場所があるんです。傷に効くといわれているので多くの人を訪れるんです。」

よっぽどこの村が好きなのか興奮している。

まあでもこっちにも温泉があるのは驚いたな。

理論上はありえるのだが、文化が違うとそもそも風呂に入るという概念がなかったりする。

お仕事で海外に行ったある国では水は貴重なのであかすりという店にいったって水は使わずに体をきれいにした。

とりあえずしばらくレイラの村に住むかな。

おっ入り口に着いたようだ。

しかし・・・これは・・・

「驚きました？」

「なにこれ・・・」

「わたしの村の名物＜死の100段階＞です。」

そっじゃないよ・・・

看板に書いてある文字だよ。

どうみても村の名前って感じだよな・・・。

ここまでいえばわかるよね？

はい、読めません。

・・・マジですか・・・

相当めんどくさいことになるな。

だって本とか読めないと情報がわからないじゃない。

「あのさあ、衝撃の事実なだけどさ。聞いてくれない？」

「はい？なんですか？」

「えっとね、俺の村と字が違うみたいなんだよね・・・あははっ。」

「そうなんですか？じゃあ後でわたしが教えてあげますよ。」

・・・なにこの人マジ天使だなあ。

俺みたいな世間知らず（レイラから見たら）にどうしてこんなに優しいの？

あっ。

そういえば恩を返すとかいってたっけ。

だよー。

そうじゃなきゃ俺なんかに優しくするわけないもんねー。

「わたしが代わりに読んであげます。これはユクモ村って読みます。

わたしの村の名前です。」

ほんとステキな笑顔。

よほどこの村が好きなんだろうな。

「フッフッフこの階段を登っていきます。わたしは登り慣れていますけど始めての人にはきついですからゆっくりいきましょう。」

「俺は体力に自信あるから大丈夫だよ。」

「始めはみんなそういいいます。」

・・・

俺は普段は輪廻は1つも使っていない。

理由はそもそもかなり鍛えてあるから必要ないというのもあるが、肉体に異常な負荷がかかるということもある。

スタミナを通常よりかなり多く消費するということだ。

武器等を召喚する畜生道は一瞬だけだから全然大丈夫だが、他のは



1日に1時間も使い続ければ1週間は立てなくなる。

しかし、今が使い時だと思った。

「じゃあ登りましょうか？」

「ちょっと待って。」

「なんですか？」

「競争しない？どっちが上に早くつくか。」

我ながら子供っぽい。

「いいですよ。けどあんまり無理しないほうがいいですよ。それではいきますねーよい、どん！」

人間道ON

脚力強化。

「必殺、脅威の10段飛ばし！」

1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8, 9, 10

はい、ゴール。

10歩でついたぜ。

レイラはまだ30段目ぐらい。

女の前ではつかっこつけたくなるのは男のさが。

しばらくしてようやくレイラが追いついた。

で、こういつてきた。

「本当に人間ですか？」

銀牙の心に1000ダメージ。

銀牙の心は力尽きました。

でもそこで天使の発言。

「でもほんとすごいですね。どんな修行をしたらそんなに強くなれるんですか？尊敬しますよー」

さらに最高の笑顔。

天使はザオ○クを唱えた。

銀牙の心は生き返った。

「ふう危なかった。」

「なにがですか？」

「いや、こっちの話。」

「????」

「気にしないでいいから。」

これ以上はつつこんでこなかった。

でも変な人と見られたかもしれないな。

あ、もとからか。

「ギンガさん、わたしはクエストの報告にいきたいのですが・・・」

「ああ、じゃあ適当にブラブラしてるから終わったら呼んでよ。」

「・・・」

「ん？」

「わたしのこと嫌いですか？」

突然の発言。

「な、な、なにをいってるの！？そんなわけないでしょ!!」

「じゃあ一緒に来てくださいよ・・・」

消え入りそうな声。

「もちろんいいさ。てか始めからそういつてくれればもちろんついていったさ。」

はい、天使復活。

俺は左手を抱くように引っ張られて頂上の建物に向かった。

途中で会った村人の白い目。

明らかにおれのいでたちのせいだろう。

レイラは時折心配そうにこちらを見る。

その度に俺は「大丈夫だよ。」っていつて微笑む。

それで彼女の顔は赤くなって目を背ける。

そんなことを繰り返していると着きました。

ここでクエストを斡旋するらしい。

レイラいわくもともとクエストを斡旋するハンターズギルドと温泉が合体していたのだが、ハンターが増えてきてからは酒場も開いたらしい。

レイラに連れられ真っ先に受付に向かう。

「ローズさーん。」

「はあい。レイラ。クエスト達成おめでとう。」  
受付の美女はローズというらしい。

「えっ!? 違いますよ。10匹が目標ですけど5匹しか倒せませんでした・・・」

やべっ、俺がトカゲどもを駆逐したのいうの忘れてた。

「あらそうなの? でもユクモ溪流からはジャギイがいなくなったそうよ?」

あそこはユクモ溪流というらしい。

「えと、もしかしてギンガさんが?」

「えっと・・・レイラが気絶した後50体ぐらい現れたから全滅させたけど?」

正直に告白。

2人とも絶句。

「ほんとう? ていうかあなただれ? そもそもハンター? てかなんで一緒にいたの?」

「そんな質問攻めにしないでください。まず俺は銀牙不知火。旅人です。ハンターじゃありません。まよってそこに入り込んでしまいました。偶然レイラがジャギイ? に襲われている場面に出くわしたので助けたまでです。」

「密猟者とかじゃないの?」

「違います!」

これはレイラ。

「ギンガさんは悪い人ではありません!」

すいません。

結構悪い人です。

暗殺とかやってます。

「ギンガさんのことなにも知らないくせにひどいこといわないでください!」

・・・俺はどうすればいいんだろう。

「ごめんねそういうつもりじゃないのよ。でもハンターでもない人がジャギィを50体狩ったっていったら怪しむのは当然でしょ。それに素材は取ってないみたいだけど一応密猟よ。」

「そうですけど・・・」

言い返せないようだ。

「ギンガくんだっけ？」

「はい。」

「決められたハンター以外がモンスターを狩ることは禁止されているのよ。」

「レイラから聞きました。」

「そう、なら話は早いわ。不法侵入と密猟で牢獄いきよ。」

「なっ！！！」

なんだと！？

「そんな待ってください！？ギンガさんはわたしを助けるためにやったんですよ！？」

「はい、そこで交渉ね。」

「交渉？」

「ハンターにならない？」

なんでやねん。

「納得がいかないって顔してるわね。」

「あたりまえじゃないですか。」

「私が書類そう・・・私があなたはハンターで、2人で狩りにいったってことにしてあげるわよ。」

書類操作っていいかかなかったか？

「えと・・・それならいいのかな？レイラ？」

「は、はい。もちろんそれなら大丈夫です。ありがとうございます。ローズさん。」

「ふふふいいのよ。うちのギルドとしても優秀そうな人材を手に入れられるしね。」

それが魂胆かこの女。

「じゃあ、用紙に必要事項を記入して。」  
げ。

字が読めないということは、もちろん字は書けない。  
「・・・悪いんですけど俺、字が書けないんです。」

「そう？じゃ、レイラ書いてあげて。」  
なんか普通の対応だな。

この世界だと字が書けない人は結構いるのか？

「わかりました。ギンガさん。母印だけ押してください。」  
用紙の一番下に枠があるな。  
ザク

「ちょ!!!!!!!!!! なんですか？」

ローズがいきなり小刀で親指を切りつけてきた。

「ん？母印は血で押すからね。」

だからといっていきなり切りつけることはないだろう。

「はい、これでハンター登録終了ね。わからないことはレイラに聞いてね。」

「ありがとうございます。」

ああ疲れた。

「レイラ、これは報酬ね。」

と、いって麻の小袋を渡している。

「うっ・・・わたしは依頼を失敗したわけですから受け取れません。」  
「

「そう？じゃギンガくんもらってくれる？」

これ以上はめんどくさいので素直に受け取る。

「とりあえず村長に挨拶しにいきましょう。ハンターになったら挨拶をしにくのがここのルールです。」

もうめんどくせー。

疲れたって。

しかし、レイラに半強制的に連れていかれる。

ギルドをでて、来た道に戻っていく・・・。

「レイラ」

フフフフ。

結果オーライ。

ギンガは旅人っていつていた。

つまり、いずれどこかにいつてしまうということだ。

それを防ぐにはユクモ村に腰をすえてもらうしかない。

レイラはそう考えた。

運び車のなかでもずっと計画を練っていた。

それがローズのおかげでいとも簡単に達成できた。

（あとは村長に会わせて居つきハンターにするのみ！）

最後の関門である。

村長は人の實力を見抜くことができる。

で、気に入った人は必ず専属契約をさせる。

（村長のしつこさはほんと恐ろしいのよね・・・）

以前気に入ったハンターを追いかけて他の村までいったこともある。

（そのおかげでこの村がハンターの村になったんだけどね。）

ギンガの實力からして確実だろうとレイラはにらんでいた。

「・・・レイラ？聞ってる？」

「ふえ？」

しまった。

なにかいっていたようだ。

「すいません。少し考えごとをしていて・・・」

「そっかごめん。村長さんの家はどこ？って聞いたんだけど？」

「正面のこの家です。」

（村長いるかな？）

コンコン

「レイラです。村長いますかー？」

すると中から、

「レイラ？ちょっと待ってー。」

返事が返ってきた。

（よかった。ちゃんといたみたい。）

レイラは安堵した。

「ごめんごめん、今まで昼寝しててね。」

家のドアが開いた。

（しまった！）

レイラは後悔した。

そこには盛大な寝癖がついて、服が肩から落ちて下着が若干見えている美女がいた。

「あれ？そのぼうやはだれ？」

ギンガに対する問いだ。

しかし、ギンガは硬直している。

「そ、村長！下着見えてます！！！！」

「え？あらそう？」

まるでなんでもないことのようにいう。

「ギンガさんもなに見てんですか！村長も服を正してください！！！」

「ご、ごめんなさい。」

「別にかまわないんだけどねー。」  
そういつて服を正す。

「で、ぼうやはだれ？」

「ぼ、ぼ、僕は銀牙不知火といいます。先ほどハンター登録をしました。」

顔が真っ赤になっている。

「で、挨拶をするために連れてきたというわけです。」

「そかそか。私はこの村の村長をやっている。村長とよんでくれ。」  
と、いつて村長は少しだまる。

「ギンガくんだっけ？、上手く隠しているみたいだけど相当な実力

者だね。」

「!!!!」

ギンガが驚愕する。

「ひと目でなぜそう思うんです?」

ギンガが問う。

「私はわかるんだよ。そういうの。長年ハンターを見ているからね。」

「・・・村長、あなた、いくつですか?」

「女性に年を聞くのは失礼だぞ。まあいいや、200を超えたぐらいだったっけな。」

「200!?!」

ギンガが驚くのも無理はない。

村長とよばれる女性は見た目はせいぜい20ぐらいなのである。

「竜人族って知らないかい? 私はそれなのだよ。私たちは最高で1000年ぐらいの時を生きるのだよ。」

「そうなんですか・・・」

「で、これから君はどうするんだい?」

ギンガは即答する。

「この村に腰をすえようと思います。」

「ふえ!?!」

予想もしない答えがでてきた。

「い、いいんですかほんとに? というか旅はどうするんですか? てかなんでここに?」

今後の予定としては、村長の力を借りて、専属契約をさせて、ゆっくりとこの村のよさを知ってもらおうと思っていたのである。

「他にいくあてもないし、この村にはレイラもいるしね。」

（!!!!!! どういう意味!?!）

自分でもわかるくらい顔が赤くなっている。

「ほほう・・・」

村長が得心を得たという顔で笑っている。



「なに笑っているんですか村長！」

怒りをこめていった。

しかし村長は意に介さず、

「いや、おもしろそうなのが見れそうだと思ってね。」

ニタニタ笑い続けている。

（いつか殺す！！！！）

そう決意した。

「じゃあよろしくね。ギンガ君。」

「こちらこそ。よろしくお願いします。」

2人は握手を交わしていた。

「レイラもこれからよろしくね。」

と、いつてわたしの手を握る。

ごつごつしていて、それでいて温かいギンガの手。

わたしの顔は真紅という表現が正しいくらい赤くなった。

そして嬉しさのあまり意識を失った。

#### 第4話 ようこそユクモ村（後書き）

ようやく名前が出ました。レイラです。由来とかは別にありません（笑）

ちなみに村長は名前を出す予定はありません。村長と呼んでやってください。

ゲームのユクモ村や村長とは結構違います。ユクモ村のその後とでも考えてください。

感想よろしくお願いします。

改正 一部レイラがレイナになっていました。竜人族が竜神族になってました。

## 第5話 村長の計略、そして銀牙の大暴走!?(前書き)

途中から対人戦になります。受け付けない人は読み飛ばしてください。

## 第5話 村長の計略、そして銀牙の大暴走!?

チュンチュン

窓の外から小鳥のさえずりが聞こえる。

太陽は完全に姿を見せている。

だが2人は目が覚めているにも関わらずベットから起き上がろうとしてはいなかった。

少し彼らの身の上の話をしよう。

銀牙は不知火家の訓練はクリアしているが、女性に対する訓練は受けていない。

彼の祖父いわく、そういうのは自然に身につくらしい。

また、レイラは10歳でハンターを志した。

そして、ハンター都市ドントルマにある訓練学校を半年前に卒業した。

しかし彼女は非常におとなしい。

4年半の間女子グループの中で過ごした彼女は男子との交流がまったくなかった。

・・・つまり2人とも異性に対する免疫がまったくないのである。  
で、今、そんな2人が1つのせまいベッドの上に並んでいるのである。

気まずい空気が流れる。

なぜこんな状況になったのであろう？

時は遡り村長の家に戻る。

（銀牙）

「宿がない!？」

そんなばかな。

この村は温泉の癒しを求めてたくさんの人が来ると聞く。

それなのに宿が一軒もないだと？

「あーなんか勘違いしてない？空いてないっていう意味だよ。」  
そういう意味か。

「団体客が来ているんだよ。それで部屋は満杯なのさ。」

「そうですか・・・」

それならしかたがないだろう。

「僕はどうすればいいんでしょう？」

「んーレイラの家泊まればいいんじゃないのかな。」

「はあ！？それはまずいんじゃないかな・・・」

いまだ気絶しているレイラを見る。

あの後レイラはなぜか（自覚なし）気絶してしまったので、村長の家で休んでいる。

「レイラは快く引き受けてくれると思うよ。」

「いや・・・でも・・・」

レイラは1人暮らしと聞いている。

「なんだね君は？まさか2人きりになったら間違いを犯すんでも？」  
「！！！！」

俺はそういう話題に弱い。

「な、な、な、そんな、そんな・・・」

「ならいいじゃないか。ちなみにレイラに家を貸しているのは私だから彼女は絶対に断れないんだよ。」

さいですか・・・

ちよっとまで俺。

よく考えてみる俺。

同じ年のあんな可愛い女の子と1つ屋根の下。

だめだだめだだめだーーーーー

ボン

頭がショートした。

ボタン

薄れゆく意識の中で最後に村長が、

「若いねえ」

と、いつていたのが聞こえていた。

「レイラ」

（なんでこんな状況に！！！！）

心のなかでそう叫んでいた。

レイラは今、ベットに寝ている。

命の恩人、ギンガと共に。

（あの人がやったのね。）

レイラはすべて理解している。

実はこれは村長の計らいである。

家を貸してくれているだけあって合鍵を持っている村長は、気絶している2人をこっそりレイナの家運び込んだのである。

村長は他人の恋愛を見るのが好きだ。

おそらくわたしたちをくつつけようとしたのであろう。

（ちよっと強引すぎるわよ。）

そりゃそうだろう。

現にわたしのすぐ後に目が覚めたギンガはフリーズしてまったく動かない。

気まずい空気が流れ続ける。

たしかに昨日もベースキャンプのベットで一緒に寝た。

しかしあれはベットというより敷物ってかんじだ。

面積も3倍以上ある。

しばらくして気まずい空気を破ってきたのはギンガの方だった。

「え、ええと、なにも覚えていないんだけど、俺はなにかした？」

深刻な表情をギンガはしていた。

その言葉の意味を理解するのに時間はかからなかった。

なにせ、ギンガは上半身裸でわたしはインナーだけだったのである。

(すごい・・・)

しかしギンガの質問にも答えず、おもわず見惚れてしまう。

無駄のない筋肉と数々の傷。

あきらかにボウガンで撃たれた傷もある。

前にも思ったがいったいどんな人生を歩んできたのだろう。

凝視していることに気づき、恥ずかしくなり、顔を背ける。

「え・・・・・・・・まじかよ・・・・・・・・」

絶望的な表情に変わった。

ここでギンガがとんでもない勘違いをしていることに気づく。

「ち、ちがいますよ。これはおそらく・・・」

自分の考えを話した。

恋愛うんぬんを除いて。

く銀牙く

「村長、なんてことしてくれたんだ!!!!」

敬語はすではずれている。

「ははは昨日はよく眠れたかい？」

「ぬぬぬ!!!!」

さつきはとんでもない勘違いをしてしまった。

レイラに会わせる顔がない。

なぜかレイラの家には服はなかった。

しかたがないので上半身裸のまま村長の家に来た。

途中でだれにも会わなかったのは奇跡だ。

『黒髪黒目の変態出沒』なんて噂になったら大変だからな。

「ちょ!!!! わかったごめん、わかったから剣を離してくれえええ  
!!!!」

雷切の代わりに召喚しておいた短剣＜朱雀＞を少しだけ鞘からだし見せつけると、予想通り村長はすぐに白状した。

レイラの予想はズバリ当たっていた。

「まったく・・・」

装備は2人を運ぶとき、重いからはずしたそうだ。

ちなみにレイラはインナーと防具の他に着る物はないらしく、（年頃の女の子としてそれはどうかと思うがな・・・）自宅で待機している。

「そうそう君の剣は武具工房に修理にだしておいたよ。昨日だしただからもうできてると思うよ。」

「・・・金ほんどもってないぞ？」

「もう敬語使う気はないのかい・・・」

「ん？ 必要あるか？」

そういつて再び朱雀に触れる。

「わかった、すまん、なんでもない。金は心配しなくていいよ。ローズから聞いたんだけど、レイラを助けてくれたそうじゃないか。その礼として私が払うよ。」

・・・ほう。

人を見る目はあっても武器を見る目はないらしい。

雷切は作成に1億円以上かかったと聞いている。

いったい修理にいくらかかるのだろう。

「わかった。レイラに防具を届けたら一緒にいってみる。」

「お金払わないといけないから先にいってるよ。」

「・・・なるべく金持ったほうがいいぞ。」

「はははわかったよ。高そうだもんね。君の剣。」

・・・滑稽だな。

まあいいや。

レイラが家で待ってるから急がなきゃ。

防具を受け取り家に戻る。

事情を話して一緒に武具工房に向かう。



村に來たときそれらしいものを見かけているから場所はわかる。

村長はすでに來ていた。

「俺の剣は？」

「おっ早かったねギンガ君。さあ彼に渡してやってくれ、ガンズ。」  
ふむ、いかにも親方ってかんじのおっさんはガンズというらしい。  
するとこのおやじは大声で村長とひそひそ話を始めた。

（おい村長、こんな鼻垂れ小僧があれを持ち込んだのか？）

（そうだよ。彼若いけどかなりの強者だよ。）

（ほんとか？ガキが扱える代物じゃねえぞ。どっかで盗んできたんじゃないのか？）

カチン

頭に来た。

一緒に聞いていたレイラがなにかいおうとしているのを、片手で制する。

「おいおっさん。ガキかどうか試してみるか？」

「ほう威勢だけはいいな。わしは若い頃はG級ぎりぎりまで上り詰めたハンターだったんだぞ。」

「はあ？」

きよんとする俺にレイラが教えてくれた。

「ハンターの強さには下位、上位、G級の3種類があるんです。また、G級はケタ違いに強いといわれています。」

「つまりあのおっさんはたいしたことないってこと？」

「ほざけ。そんなことも知らないガキがなにをいう？」

「じゃあそんなガキより弱いあんたはなんなんだ？」

「!!!!殺す!!!!」

ガンズは立て掛けてあった大剣を勢いよく振り下ろしてきた。

そして、俺の体は宙を舞った。

勢いよく吹き飛ばされ壁に叩きつけられた。

くレイラく

ピチャ

ほおになにか飛んできた。

おそるおそるそれにさわる。

それは、どす黒かった。

血。

わたしの、命の、恩人の血。

「口ほどもねえな。」

声の主は大剣くヴァルキリーブレイドくを元の位置にもどす。

ヴァルキリーブレイドは雌火竜リオレイアの素材がふんだんに使われていて、切り口から相手に毒を送り込む。

この村ではかなりの上物だ。

そんなものでこの男はギンガさんを、斬った。

「よくもおおおおおお！！！」

わたしは腰に提げている剣を抜いた。

愛剣くソルジャーダガーくである。

一昨日殺されかけたジャギイの素材と希少鉱石く大地の結晶くでできている初級レベルの剣である。

ジャギイは群れでなければたいした脅威ではない。

わたしでも今までに何頭も狩ってきた。

大地の結晶はユクモ溪流に何度も通い、採掘したものだ。

ちなみにこの剣はガンズに造ってもらったものだ。

丸腰のガンズにその剣先を向ける。

「うああああ！！！」

そのまま突っ込んでいく。

初級の剣でも防具を着ていないガンズになら充分ダメージを与えられるだろう。

対するガンズは素手で迎え撃とうとする。

そしてこちらを見てニタリと笑う。

その瞬間悟った。

こいつには勝てない。

ギヤイン

ソルジャーダガーが叩き落とされる。

もちろん素手で。

慌てて付属の盾を構える。

ベキッ

いやな音をたててそれは破壊された。

身を守るものはもうなにもない。

躊躇なくガンズは踏み込んでくる。

そしてわたしを手刀で打ち据えようと振りかぶった。

絶体絶命。

しかし、恐怖はなかった。

「大丈夫だ。レイラ。」

やっぱりギンガはわたしを助けてくれる。

わたしとガンズとの間に入り、その身で手刀を受ける。

ドン

「ぐああああああ！？」

悲鳴を上げたのは、ガンズ。

「てめえなにもんだあ！？」

「安心してくれ。あんたが叩いたのはコイツだ。」

さっきの優しい声と違い、黒くて冷たい声。

そういつて彼は羽織っていた防具を脱ぎ、さらにもう1枚分厚い服を脱ぐ。

「モンスターの素材というのはほんと恐ろしいね。鉄でできている鎖帷子が切れちゃったよ。」

ギンガはそういつてクサリカタビラとかいうものを脱ぎ捨てた。その体には薄っすらと赤い筋が入っていた。

「はん、そいつに守られたってわけか。驚かせやがって。」

ガンズはいまだに強行姿勢だ。

「レイラ。」

「はい！」

いきなりわたしに話しかける。

「怖い思いをさせてすまなかった。」

ギンガは頭を下げる。

「・・・ていたよ。」

「えっ？」

「ギンガ、ずっと信じていたよ。」

想いを口にできた。

「そっか。」

ギンガはわたしが怖い思いをしていないことを確認すると、ガンズに向き直る。

「お喋りは終わったようだな。遺言はあるか？」

「必要ない。」

ガンズはいつの間にかヴァルキリーブレイドを手にしている。

わたしとギンガが話している間に取って来たのであろう。

姑息なやつだ。

でもギンガが負けるわけがない。

ガンズはヴァルキリーブレイドを腰に構え走り出す。

大剣を持っている動きとは思えない俊敏さ。

やはりそれなりの実力者だったのであろう。

ガンズはそれをまるで太刀のように扱う。

「はああああああ！」

切っ先を向け、構え、突く。

すっ

銀牙はそれを音もなく片手で受け止めた。

「なあ！！！！」

ガンズは驚愕する。

最大の一撃が受け止められたからである。

「その程度か？」

銀牙は冷たく言い放つ。

「武器を使った以上、覚悟はあるんだろうな？」

ガンズは悟る。

絶対強者を。  
その存在を。  
今、自分が相手にしていることを。

数秒の静寂の後、溢れんばかりの殺気があたりを覆い尽くした。  
ガンズも、  
村人も、  
いつのまにかできていたギャラリーも、  
書類操作をしていたローズも、  
酒場でさわいでいたハンターも、  
運び車のアイルーとガーグアも、

みんなが恐怖を覚えた。

ただ2人。

殺気を放つ本人とその後ろにいる少女を除いて。

彼女にはわかっていた。

これはガンズに向けられたものじゃない。

今この場にはいない誰かに向けてだ。

・・・銀牙の過去になにがあったかは彼女は知らない。

それを知るのは彼と彼の血縁者のみ。

だけどころもある。

彼は自分を責めている。

「うやあああああ！」

ガンズは狂ったような声を上げる。

そしてヴァルキリーブレイドを銀牙に向かって振り回す。

もはや狙いもつけていない。

銀牙はそれを軽々と避ける。

そして・・・

「武器の重みを知れ・・・」

今まで戦闘で1度も抜かなかった短剣朱雀を抜いた。

「奥義『地獄の血雀』・・・」

これは地獄道を使う奥義である。

しかし銀牙は適性が低い。

ゆえに彼なりにアレンジしたものである。

強いていうなら『改』ということだ。

見えている刃は偽者であり、その前に一瞬早く刃は通り過ぎる。

避けようとしても見切れない。

剣で受けてもタイミングが合わず押し込められる。

対象はいつのまにか血に染まっていくという技である。

しかし、これはあまり実用的な技ではない。

暗殺には向かず、それでいて時間がかかるからだ。

しかし銀牙はこれを選んだ。

ガンズに己の愚かさを悔いさせるために・・・

チーンザクチーンザクチーンザク

火花が散る。

血も飛び散る。

完全にいたぶられている。

ヴァルキリーブレイドはボロボロになっている。

これ以上は耐え切れないであろう。

そんなことを考えていたら隙ができる。

「終幕『血霧の断罪』」

地獄道と人間道を併用し、最大の一撃を決める。

バキン

予想通り。

大剣は折れた。

ガンズの心と共に。

ガンズはそこで地に伏せた。

しかし、銀牙は止まらなかった。

朱雀を構え、止めを刺そうとしている。

その剣は確実に首を捉えた。

いや、そのはずだった。

直前で止められた。

剣を持つ右手はレイラが押さえていた。

「はなせ・・・」

「はなさない!!!」

「俺はこういう愚図がきらいだ。人を傷つけるものを軽々しく使うやつがな。」

「ギンガは悪くないよ。」



「!？」

「ギンガの過去になにがあったのかはわたしにはわからない。でも、自分を許してあげなよ。」

俺は悪くない。

確かに、だれかにそういつてほしかった。

でも俺の周りにいたのは事件のことを忘れるという大人だけだった。ふっ、出会って3日目のやつにいわれるとはな・・・

俺もまだまだだな・・・

ブツン

俺は糸が切れるように意識を失いレイラにもたれかかった。

「お疲れ様。」

レイラは2つの意味でそうつぶやいた。

のちに語り継がれるこの大事件はこうして幕を閉じた・・・

**第5話 村長の計略、そして銀牙の大暴走!?(後書き)**

銀牙の過去はいずれ明かされるでしょう。それまで私のやる気が続いているば・・・。

感想、評価よろしくお願いします。

改正 題名がいまいちなので変えました。

## 第6話 擦れ違う想いとギルドナイト（前書き）

少しでもギンガの過去を書きました。核心には触れてませんが・・・

## 第6話 擦れ違う想いとギルドナイト

あの事件から3日。

銀牙はまだ起きない。

それもそのはずである。

適性度が低い地獄道を長時間発動し、さらには2つの輪廻を同時に発動したのである。

銀牙を診た医師は事件の一部始終も見ていたが、もちろん輪廻のことを知らないので、肉体のリミッターがなんらかの原因ではずれてしまい、分不相応な力が肉体を傷つけた、と診断した。

あながち間違っではないが、実際はこれは単なるスタミナ切れである。

回復するために眠りにについているだけで、そんな深刻なものではない。

しかしそれを知るのは銀牙だけ。

それでもレイラは銀牙を信じて、待ち続けていた・・・

余談だがその医師は銀牙がまったく毒の影響を受けていないことに大変驚いたそうだ。

（銀牙）

俺は夢を見ていた。

いや、過去を見ていた。

3歳より前の記憶はあまりない。

あまりにもむごたらしい修行の記憶はその頃の俺にはまだ耐え切れなかった。

ゆえに脳が自動的にカットしてくれていた。

まず3歳の誕生日、今まで食べてきたものには少量の毒が含まれていたことを告げられた。

毒の耐性をつけるためとはいえ、かなりショックだった。しばらく体が食べ物を受け付けなかった。

次に4歳の頃、妹が生まれた。

そして、同時に母親が命を落とす。

難産だった。

産声を聞くと同時に力尽きたそうだ。

悲しくはあったが、人はいつかは死ぬもの。

そう教え込まれていたため、涙はでなかった。

それからしばらくは修行の日々。

ついに7歳の頃に修羅道をマスターした。

じじいの困惑した顔を覚えている。

当時はただ驚いてるだけだと思っていた。

今思い返せばネックレスのことで心配していたのだろう。  
あれ？

そういえばネックレスはどこいったんだろう？

・・・まあいいや。

そして10歳。

初めて人を殺した。

しかも、3歳年上の、実の兄を、俺が、この手で。

兄貴はお調子者だった。

いい方を変えれば緊張感のない人だった。

裏家業を営むにはもともと向いていなかった。

ゆえに、じじいにも見捨てられた。

で、俺が次期不知火家主候補として選ばれる。

そんな彼は非行に走った。

そして・・・・・・・・

そこで体に痛みを感じる。

ゆっくりと目を開いた。

そこは先ほどまでの血で塗られた景色ではなかった。

あの日の朝、俺が目覚めた場所だ。

すぐそばには俺を待ち続けてくれた人がいた。

「おはよう、ギンガ。3日も寝てたんだよ？」

声の主はそういつてニッコリと微笑む。

また、この笑顔を見れて、俺は幸せ者だ。

俺の頬も自然と緩む。

「おはよう。レイラ。」

「レイラ」

「ただいま、レイラ。」

そういつてギンガも微笑む。

思わず彼に抱きつく。

ギンガも抱き返す。

そして、わたしは告げる。

「ありがとう。」

すると、ギンガの表情が一変し険しくなる。

そして、

「・・・違うよ。」

ギンガは続ける。

「札をいわれるようなことはなにもしていない。俺は、怒りに任せてあいつを殺そうとしただけだ。ただ、あいつが赦せなくて・・・」

「でも結果的にわたしを助けてくれたでしょ。それに、ギンガは悪くないよ。そんな顔しないで。」

わたしの想いをぶつける。

「わたしはギンガのそんな顔は見たくない。ギンガには笑顔が一番似合うから。」

そして、

「それで、わたしも笑顔でギンガの隣に立ちたい。」  
考えようによっては告白同然である。

「・・・ありがとう。」

と、いつてギンガは笑顔にもどる。

よかった。

ギンガは納得してくれたようだった。

「で？あの後どうなったの？」

「え？ええと・・・」

気絶した後のことだろう。

「ギンガは倒れちゃって、それで村長と一緒にここまで運んだの。それで・・・ガンズさんはたまたま来ていたギルドナイトに連行されて・・・」

「ギルドナイト？」



そうだ、ギンガはなにも知らないんだった。

「ギルドナイトっていうのは通常のハンターとは違って、密猟者やハンターの品位を落とすような人を取り締まるハンターのことをいうの。」

「へえ・・・てかあれくらいで逮捕されるの？」

おもいつきり斬られてあれくらいとは・・・。

「うん・・・武器を人に向けるのはご法度なの。それで、喧嘩でも武器を使ったら問答無用で逮捕されるのよ。」

「ええ！？じゃあ俺もやばいんじゃない？」

ギンガは気まずそうにいう。

「あの場合は大丈夫だよ。相手が先に武器を抜いたら応戦してもいいことになってるから・・・。」  
と、いつてから考える。

ギンガが本気で怒ってからの動きは一方的だった。

正当防衛とはいえないだろう。

「たぶん・・・。」

そうつけ加えた。

するとギンガは、

「まあ、そうなったらどこかにでも逃げるからいいさ。」  
と、いつてくる。

「えっ・・・」

まさかそんなことをいわれるとは思ってもみなかった。

(どういう意味！？わたしのことはどうでもいいっていうこと？)

「わたしを置いて？」

おもわず呟いてしまった。

ギンガはびくんと反応する。

消え入りそうな声であったにもかかわらず聞き取れたようだ。

「レイラ・・・。」

彼の声もまた消え入りそうなくらい小さい。

「おまえを危険には晒したくない・・・。」

「そんな勝手なこといわないで。どこにいきようが、わたしはずっとギンガについていく。」

いってから気づく。

これってプロポーズなのでは？

銀牙も驚き、狼狽する。

「ええ！？そ、それはどういう意味で！？」

顔が真っ赤。

おそろくわたしも。

「ち、ち、ち、違うよ。恩を返すまでずっとっていう意味よ！！！」  
恥ずかしくてつい嘘をいってしまった。

（わたしのほかぁ！！！！）

「な、なんだそういう意味か・・・」

ギンガは明らかに落胆している。

え、それってもしかして・・・

そう考えたときふいにドアが開いた。

「レイラ？ギンガは起きっ・・・君達はなにをしているんだい？」

空気を読まず入ってきたのは村長。

そして彼女は苦笑した。

なぜなら、ギンガは包帯を巻いているが上半身裸。

レイラはインナーのみ。

そんな2人が抱き合っていたからだ。

「・・・お楽しみ中邪魔して悪かったね・・・」

「！！！！！！」

とんでも発言。

「ななにも変なことしていませんよ！ね？ギンガ？」

「そ、そうだよ。俺はなにもしてないよ！！！！」

2人で必死に弁明する。

「はっはっは。ところでレイラはいつからギンガに敬語を使うのをやめたんだい？」

あ、ほんとだ。いつのまにかタメ口で喋っている。

「もしかしてそんな親密な関係になるようなこと」「違うよ（いますよ）！！！」・・・まあいいや。ギンガ君は体は大丈夫かい？」

「ああ、大丈夫だ。」

「そかそか。じゃあ後でギルドに顔を出してくれ。赤服どもが聞きたいことがあるんだそうだ。」

「赤服？」

「村長。ギンガさんはハンターになったばかりです。そんないい方じゃわかりませんよ。」

「はははそうだった。赤服ってのはギルドナイト共のことだ。奴等はいいつも赤い服を着ているからそうよぶんだよ。」

「・・・村長はそのギルドナイトってのは嫌いなのか？」

「ああ。それにハンターだったらみんな嫌うさ。」

「なんでだ？」

ギンガはほんとなにも知らないなあ。

「奴等は傲慢だ。しかも奴等は独自の考えを持つ。」

「独自の考え？」

「ああ」

なんかわたし影が薄くなってない？。

「ハンターは粗暴で野蛮。だからそれをまとめ、統率するものが必要だ。それがギルドナイトって思っているのさ。」

「???」

「よくわからないって顔しているね。まっ君もハンターになったんだからそのうちわかるさ。」

「とにかく偉そうってことか？」

「簡単にいえばそういうことさ。」

・・・わたしが口を挟むすきまがない・・・

「そうだ。はい、君の剣を預かってきたよ。」

修理にだしていた雷切だ。

「ガンズの不祥事の咎びにただにしてくれたさ。・・・ほんと君は性格悪いね。修理代が本来100万ゼニーだとは・・・」

「100万ゼニー!?!」

100万ゼニーあれば、G級の最高峰の武器が作れる。  
それが修理代になんて……

「まっ、これで私の用事は終わりだ。引き続き楽しんでくれ。」

「殺す!!!!」

思わずいっちゃった。

村長はごめんごめんといいなから逃げていった。

「じゃ、とりあえずギルドにいつてくるよ」

「わたしもついていく!!!!」

声がつい大きくなる。

「でも聞かれるのはどうせあのことだろ? 聞きたくないだろ?」

「別にかまわないよ。」

少しでも一緒にいたい。

そんなこといえるはずがなかった。

「じゃ、一緒にいくか。」

そういつてギンガは着替え始める。

ぐるぐると巻かれている包帯をほどく。

すると、ガンズに斬られた傷は跡形も無かった。

「!!!!」

「?」

ギンガは平然としている。

すごい治癒力だなあと思いつながらわたしも着替えを始める。

使い込んだハンターシリーズを装着する。

「はあ」

おもわずため息を漏らす。

いつもなら最後に腰にソルジャーダガーを収める。

ガンズに叩き落とされたときにひびが入り、使い物にならない。

盾は破壊されてしまった。

また一から作り直さなければならぬ。

「ん? どうした?」

ギンガがたずねてくる。

ギンガはすでに着替え終えている。

といっても彼はガンズに防具（皮ジャン&防弾チョッキ&鎖帷子）を破壊されているので、村長が用意したTシャツを着ただけだ。

腰には2本の剣を提げている。

「あるとき愛剣がこわれちゃって・・・」

「そうか・・・残念だったな。俺のでよかったらやるよ。」

そういつて短剣を差し出してきた。

「いいの！？これかなり高いんじゃない？」

「気にするな。俺は他にも持ってるし。」

ギンガはそういう。

わたしは素直にギンガからそれを受け取った。

「名を朱雀という。大切にしてやってくれ。」

朱雀。

朱色の鞘と柄。

そして銀色に光る両刃で細身の刀身。

ソルジャーダガーより少しだけ短い。

鞘に収まった状態でも、抜き身のソルジャーダガーよりはるかに軽い。

力が凝縮されているみたいだ。

こんなすごいものをくれるなんて・・・

思わず涙が出てきた。

「ありがとう。」

心の底からそういった。

そしてわたしはギンガの頬に軽くキスをした。

「な、な、な!？」

ギンガは狼狽する。

「お礼よ。いいから早くいこう?」

「あ、ああ・・・」

わたしは涙を拭き、ギンガの腕をひいて部屋をあとにした。

く銀牙く

ああ、びっくりした。

あのと、レイラに心を見透かされた時は心底驚いた。

そのあと、起きてみればレイラはタメ口になって、恥ずかしいことを平然という。

で、最後には頬にキ、キスまで・・・

「ひゅうひゅう熱いねえ！」

「似合ってるよお2人さん。」

・・・今はギルドに向かっているが、なんかやたらと村人から声をかけられる。

ことの顛末は村長がすべて話したらしい。

ガンズは元ハンターということもあって傲慢で近所の評判も悪かったらしい。

それで、村にきて早々ガンズを叩きのめした俺は一種のヒーローみたいになっているらしい。

見た目が変（黒髪黒目だから）&あんな殺気を見せた俺に普通に接してくるなんていい人達だなあ。

そんなことを考えていたら、着いた。

レイラがギルドの扉を開ける。

すると・・・

どん

と、後ろから押さえ込まれた。

「きゃあ！」

みると、レイラも押さえ込まれている。

「団長、確保しました！」

後ろをみると赤い服の男がいた。

ギルドナイト。

ああ、すっかり忘れてた。

あれはアウトだったんだな。

そのまま2人とも後ろで腕を縛られる。

「ご苦労。ルナ、ソル。彼らを座らせてやれ。」

「はっ！」

俺達は無理矢理椅子に座らせられる。

「すまなかったね。・・・ギンガ君とレイラ君だっけか？」

団長と呼ばれたリーダー格の男がいう。

それに俺は無言で答える。

「悪いが暴れられたら困るから強硬手段をとらざるを得なかったんだ。」

「なにをする気ですか？」

レイラがいう。

「なに、少し話をするだけさ。」

「・・・」

俺はなにもいわない。

ギルドナイトは3人。

俺を捕らえたソルとかいう男と、レイラを捕らえたルナという女と、

団長と呼ばれた男。

よくみると受付にも、酒場にも、温泉にもだれもいない。

人払いをしたみたいだな。

意外にも今すぐ危害を加えるようではなかった。

いったいなにを話す気だ？

「私はこの間の君の戦いを見ていた。」

「・・・」

「君は対人戦闘をマスターしている。」

「・・・」

「あれほどの腕前を持つ者は熟練者でもそうそういない。」

「・・・なにがいいたい？」

と、いいながらも俺にはもういいいたいことはわかっていた。  
「ギルドナイトにならないかい？」



## 第6話 擦れ違う想いとギルドナイト（後書き）

新キャラ登場です。ギルドナイトの三人衆。ルナ、ソル、そして団長？ 実はまだ団長の名を決めていませんWなかなかいい名が思いつかなくて・・・

銀牙の本質は控えめだったりします。1話で思わず装備を準備してしまったような小心ものです。けどもういろいろありすぎて、てんばってます。そこに恋心も混ざってもうぐっちゃぐちゃです。そんな銀牙ですが温かい目で見守ってください。

次回はギルドナイトと一悶着おこします。感想や指摘など待っています。

**第7話 銀牙VSギルドナイト。そしてレイラの意外な才能？（前書き）**

また対人です。苦手な人は読み飛ばしてくださいorz  
後半で題名の通りレイラの意外な才能（笑）が判明します。

## 第7話 銀牙VSギルドナイト。そしてレイラの意外な才能？

（銀牙）

「ギルドナイトにならないかい？  
やっぱりか。」

「断る。だいいち俺はハンターになったばかりだぜ？あんたらはハンターに嫌われてるってことしか知らないし、興味もない。」

「口を慎め小僧。」

ソルとかいう男が口を挟んできた。

「この人はG級ハンターなんだぞ？それにあんな屑どものいうことを鵜呑みにしているのか？ハンターごときに誇り高きギルドナイトの崇高なる信念が分かるわけもないだろう。勝手に妬んで騒いでいるだけだ。」

「興奮するなソル。」

「申し訳ありません。」

といいながらソルとかいう男は俺を睨みつける。  
こいつ殺ったろうかな？

「で、ギンガ君。ギルドナイトに入隊できることはほんと光栄なことなんだよ。君の実力ならすぐに幹部クラスになれるさ。そうすれば一生の富と名声が約束される。どうだい？それでもだめかい？」

「くだらない。興味ない。解放しろ。」

団長の説得をばっさと切り捨てる。

「・・・そういえば君が倒したジャギイを見にいったんだよ。すごい殺し方だね。で、そこでこんなものを見つけたんだけど。」

「！！！」

彼の手にはあの銀色のネックレスが握られていた。

あそこで落としたのか。

「やっぱり君のか。これはかなりの値打ちもんだね。銀レウスの素材が使われている。なんの偶然かな？」

「??? 意味不明???」

「そんなもんくれてやる。だから縄をほどけ。」

そんなつもりないけどな。

すると、今まで浮かべていた柔和な笑みが消えた。

「そっか、残念だよ。」

男はレイラの方を向く。

「レイラ君だっけ？ 君はあるとき丸腰のガンズに武器を向けたよね？」

「えっ・・・」

そういえばそうだったな。

たしかにレイラは武器を置いたガンズに斬りかかった。

・・・返り討ちにあったけどな。

「それにギンガ君。君は密猟と不法侵入の罪に問われたいかい？」

「なっ!!!」

なぜそのことを!？

「このルナっていう娘がね。調べてくれたんだよ。」

レイラを捕らえている女が無言で頷く。

めんどくせ・・・

「このままじゃ改ざんしたローズとかいう受付嬢もクビかなあ？」

「ずいぶんと露骨な脅しじゃないか？ ああ？」

ほんとぶっ殺したろうかなこいつら？

でもレイラがいるからなあ・・・

「それほど君を評価しているっていうことだよ。」

「・・・。最終通告だ。今すぐ縄をほどけ。」

本気の殺気を込めていった。

しかし、

「わかった。ただし君がギルドナイトになってくれるならばね。」

あ、こいつ、ばかだ。

ブチッ

鈍い音がして俺を縛っていた理性と縄がぶちぎれた。

くソルく

ユクモ溪流で銀色の\*\*\*\*を見たという情報が挙がった。  
希少種であるので、幹部1人、小隊長2人の豪華なメンバーで調査に来た。

しかし、結局見つからず、諦めて帰ろうと思ったいた矢先、団長が  
いい人材を見つけたといってきた。

手ぶらで帰るのもなんだし、計画に参加し、今に至る。

気に食わない。

団長のやり方もそうだがギンガという男が生理的に受け付けない。

団長はなぜここまでこいつを引き入れようとするのだろうか。

実力はあるのだろう。

殺気もみごとだった。

しかし、ギルドナイトをくだらないだと？

俺は10の頃から訓練して、25でようやく念願のギルドナイトになったんだ。

周りからは遅いとか才能ないとか蔑まれたが、努力に努力を重ね小隊長まで上り詰めた。

だから。

そんな俺を否定されたように思えた。

だから、

おもいきり殴ってやろうと思ってこの男に近づいた。

そのとき、

ブチッ

鈍い音と共に、男は立ち上がった。

ゝルナゝ

私はめったに表にでない。

裏で情報を集め、報告する。

それだけで小隊長に選ばれた。

しかし逆にいえばそれしかできない。

戦闘能力はあまり高くはない。

凡なハンター程度。

だがそれでもできることがある。

だからハンターではなくギルドナイトを目指した。

別にこの男がギルドナイトをどう思おうが構わない。

ソルは知りえないが、誇り高きギルドナイトなんて嘘っぱちだ。実際は私腹を肥やすために業者と癒着したり、素材を裏に流す輩もいる。

のし上がる為に仲間を陥れることなんてざらにある。

それを知ったとき私は人生に絶望した。

私はギルドナイトの駒として使われ、死んでいく。

そう思っていた。

しかし、団長に出会った。

団長は他の幹部と違って、椅子にふんぞり返り、命令をするだけの人ではない。

やり方は多少強引だが、現場で、私達と同じ目線で物事を見てくれる。

そんな団長にある時自分の思いをこぼした。

すると、

「私も同じだった。腐った組織に絶望した。しかも不正を働くもの、新人のレベルの低下、人員不足。問題は山詰みだ。しかしだれかが変えなければならぬ。だから私が犠牲になる。そう決めた。」  
といていた。

だから私はこの人についていくと決めた。

そんなことを思い出していると、

ブチッ

と、鈍い音がした。

く銀牙く

腕力強化で縄を引きちぎる。

そして、手刀でレイラの縄を切る。

慌てたソルは、再び捕まえようとする。

しかし、不意打ちでもなければ俺が捕まるわけなからう。

てかさっきのは村の中だったこともあり、油断しすぎていた。

あんなのクソ親父に見つかったら半殺しにされる。

奴等は埒が明かれないと思ったのか武器を抜いた。

銀牙は知る由もないが、団長は双剣<マスターセイバー>に<ギルドガードスーツ蒼シリーズ>、ソルはガンランス<シルバールーク>に<ギルドガードスーツ紅シリーズ>、ルナは弓<クイーンブラスター?>に<ギルドガードベスト紅シリーズ>を装備していた。マスターセイバーはG級武器である。

ちなみに蒼シリーズは幹部以上のみ着用を許される。

「おいおい。武器は人に向けちゃいけなかったんじゃないっけ？」

俺は苦笑した。

レイラがいては本気がだせない。

レイラを抱え、入り口に向かって走る。

そして大きくドアを開け放つ。

「レイラ。少し待っててくれ。」

レイラはこの言葉の意味がわかったのか、だまって頷くと様子を伺っていたギャラリィの中に吸収されていた。

これでもう、手加減する理由はない。

「さて、武器を抜いた以上、命をかける覚悟はできたんだろうな。」



早速ソルという男がガンランスで突いてきた。

俺は予め召喚してズボンに仕込んでおいた投げナイフを投擲する。  
その数3本。

それは腕と足に1本ずつ刺さった。

もう、ガンランスを突くことはできないだろう。

「くそおおおおおおお！！！！」

ソルはよほど俺のことが気に入らないようだ。

ギルドナイトをくだらないっていったもんな。

ナイフの刺さっていない腕にガンランスを持ち替え、砲撃する。

いや、しようとした。

残念だが俺が投げたナイフの最後の1本はリボルバーに刺さり、その動きを止めていた。

くわしくはわからないが、見た目的にリボルバーが動かなければ砲撃はできないだろう。

それでも無理矢理砲撃をしようとしてるから、もう1本ナイフを投げる。

それは銃身へと吸い込まれていった。

ドーン

大爆発

その衝撃でソルは吹っ飛び、したたかに頭を打ちつけ倒れた。  
ピクピクと動いているから気絶しているだろう。

俺は隙をうかがっていた団長に向き直る。

「残念だな。素直に縄を解けば怪我もせずに帰れたのに。」

「くくくますます君が欲しくなったよ。」

きもっ・・・

団長は双剣で斬りかかってくる。

それに対して俺の剣は1本。

絶対的に不利。

でも目の前で剣を召喚したらやばいよなあ。

ヒュン

そんなことを考えていると後ろから矢が飛んできた。

バキッ

雷切を抜刀し、打ち落とす。

「余所見はいけないよ。」

「ちっ！」

襲いかかる双剣を掻い潜るが、同時に矢も飛んでくる。

息のぴったりあったコンビネーション。

おそらくソルはおまけでこの2人はよく組んでいるのだろう。

このままだと反撃する暇も無い。

・・・このままだと。

ちょびつと本気だすぞ。

隙を見て雷切を納刀する。

不審に思った団長だが構わず斬りつけてきた。

しかし明らかに急所を狙っていない。

まだ俺を仲間にするつもりらしい。

ほんとばかだな、こいつ。

## 修羅道ON

双剣の片方を手を切らないように峰の方に手を回して受け止める。  
そしておもいきり力を込める。

ボキッ

いい音をして双剣の片割れが折れた。

G級の武器が破壊されたことで驚き、一瞬反応がにぶる団長に追撃をかける。

残った剣を腕ごと蹴り上げる。

団長の手を離れた剣は天井に刺さる。

そしてがら空きの腹に蹴りを入れる。

もちろん死なない程度にする。

その一撃で団長は吹き飛び入り口の付近の壁に叩きつけられる。  
ぐったりとして動かない。

ヒュン

背後から矢が飛んでくる。

しかしさっきまでのキレはない。

団長のリタイアで心が乱れたのだろう。

ルナに向かって折れた双剣の先っちょを投げつける。

狙いは弓。

ルナは自分が狙われていないことに気づくが、すでに遅し。

ボキッ

ルナの持つ弓は根元から大破した。

「まだやる？」

ルナに問いかける。

「ご冗談を・・・」

「あっそ。」

戦意はもうないみたいだな。

動かない団長からネックレスを取り返す。

「じゃあ、ゴミ2人持ち帰ってくれる？」

「・・・はい。」

ルナは素直に頷く。

そばにいたソルを叩き起こす。

目覚めたソルは再びガンランスを持つとするが、持ち上がらない。大破した双剣と弓をみてすぐに状況が読めたのか、うなだれるように戦意を失った。

あ、大事なこといいわすれてた。

「今後また来たら命の保障はできないよ。」

「・・・。」

ルナは団長を背負って黙って出ていった。  
そう、これが目的である。

最初にガツンとやっとかないと、舐められてめんどくさい事になるからね。

ルナとソルがでてすぐにレイラが入ってきた。

「大丈夫？」

あまり心配そうな顔はしていない。

「もちろん。それより追い出して悪かったな。」

「ううん。わたしがいてもお荷物だったよ。」

「・・・じゃ、お互い気にしないってことで。帰ろうか？」

「うん！」

俺はレイラに腕を引っ張られながらギルドを後にした。

くレイラく

♪上手に焦げました♪

わたしの頭の中にそんな音楽が流れた。

これで10個連続コゲ肉・・・

しかし、肉焼き初心者のギンガはとなりでこんがり肉Gを量産している。

時々わたしを見て忍び笑いをしている。

恥ずかしすぎる・・・

どうしこんなことになったんだけなあ・・・

たしかギンガと共に我が家に帰ってきた。

そこで2人ともお腹がすいた。

わたしは普段、酒場で食事をするので、上等なキッチンがあるものの、まったく使っていない。

訂正、まったく使えない。

だから食材を買い込んでいない。

しかたなく生肉を今後の分も含めて大量に行商人から購入し、こんがり肉を焼こうと思った。

それでハンター初心者ギンガに焼き方を教えようとした。

しかし、ギンガは最初こそ肉焼きセットの火力に驚いていたが一発目でこんがり肉Gをつくりだした。

ギンガにいいとこ見せようと思って大量に生肉を購入がまったく意味がなかった。

ふてくされていたがギンガに促されて、しぶしぶと肉を焼き始めた。しかしいきなり失敗をしてしまった。

気にせずもう一度焼き始めた。

・・・・・・・・・・

で、現在に至る。

わたしは普段こんがり肉の状態で購入するので（今日は売ってなかった。）、肉を焼くのは訓練学校以来である。

ふと思いついた。

わたしが作った料理はダークマターと呼ばれていたのを。

そして、訓練学校でも料理学だけはいつも赤点だったことを。

そうだった。

わたしは料理ができないんだった。

あまりにも料理を作らな過ぎて忘れていたよ・・・

「はぁ・・・肉焼きもできないなんてお嫁にいけないよ。」

「そうか？」

「!？」

しまった。

心の中の呟きが声に出てた。

しかし、ギンガは続ける。

「料理ができる人の所にいけばいいんじゃないの?・・・俺とか・・・」

ん？最後の方が声が小さすぎて聞こえなかったよ。

ギンガは顔が真っ赤になっている。

なんていった？って聞き返そうとしたらふいにドアが開いた。

「はははギンガ君とんでもないことやってくれたねえ？」

銀牙の告白は空気の読めない村長にさえぎられた。

「うっ・・・」

そうだった。

ギンガは正当防衛とはいえ、ギルドナイトを叩きのめしたのだった。村の評判も悪くなるかもしれない。

しかし村長の口から飛び出してきたのは意外な言葉だった。

「よくやった！」

「「はあ!？」」

ほめ言葉だった。

「赤服が一介のハンターに撃退される、か。ハハハ奴等の悔しがる顔が目には浮かぶよ。」

「「・・・・・・」」

どうやらギルドナイトを相当嫌っているらしい。

「おっ、こんがり肉を焼いているのか・・・くくくレイラは相変わらずだな。ギンガ、1つもらうよ。」

そういつて、ギンガのこんがり肉Gに手を伸ばす。

「だめっ!!!」

思わず叫んでしまった。

「「!!!!!!」」

2人とも驚いて固まっている。

「あっ・・・いや村長。ギンガは初めて肉を焼いたんです。最初の一口はギンガが食べるべきです。」

もちろん建前。

自分も食べてないギンガの手料理？を食べれたくなかっただけである。

「そっか。すまなかったねギンガ君。」

「いえ・・・」

「じゃあギンガ。焼くのはこの辺にして早速食べてみない？」

「そうだね。」

そういつてこんがり肉Gをほおぼる。

「うまああっ！！！！！」

ギンガの笑顔が一瞬天使のように見えた。

「はううう！」

くらっとくる笑顔。

「レイラも食べてみなよ！すっごくうまいよ！」

そういつてこんがり肉Gを手渡してきた。

わたしもほおぼる。

「！！！」

「なっ、うまいだろ？」

「うん！」

皮はパリパリで中はジューシー。

口の中で溶けるように消える。

ギンガの料理の技術は相当なものだろう。

実は不知火家には家政婦がいないので銀牙が飯を作っていたりする。

（母親死んです。）

「ギンガが作ってくれるなら料理できなくてもいいかも・・・」

小声でいったのでこんがり肉Gに感激するギンガには聞こえていなかった。

しかし、村長にはばっちり聞こえていたようだった。

「レイラ、もっと積極的にいかないとそのうち他の女に盗られちゃうぞ。」

「！！！！」

「はははごめんごめん。愛しの彼の手料理を他の女に食べられたくないだろうから私はこれでガマンするよ。」

と、いつて掴んだのはわたしのコゲ肉。

否、コゲ肉と書いてダークマターと読むもの。



「村長それは！」

「大丈夫！私の胃はそんなにヤワじゃないからね。」

そういつてほおぼってしまった。

もしかしたら半年も経ったんだからダーク化はしていないかも？

そんな考えが浮かぶ。

しかしそんな思いは通じず、村長の顔が青くなったり、緑になったりしている。

そして黒いアワを吹きながら村長は床に倒れた。

「ダークマター今だ健在ね・・・」

客観的になっているわたしがいる。

「村長おおおおおおお！！！！！」

銀牙の悲鳴が村中に響き渡った。

ちなみに毒殺されかけた村長であったが、後日銀牙がこんがり肉Gを持っていくとすっかり忘れてくれた。

**第7話 銀牙VSギルドナイト。そしてレイラの意外な才能？（後書き）**

今回一番の被害者は団長やソルではなく村長ですねw  
書いてて自分で吹きましたwあつ、引かないでくださいorz

感想お待ちしております。

## 第8話 日常に迫る脅威（前書き）

固有名詞をたくさんだしてみました。

また、伏線を張っておいたモンスターがついに登場です。

## 第8話 日常に迫る脅威

ザクザクグツグツコトコト

レイラが住み始めてからの半年間、使われたことのないキッチンからいい匂いが漂ってくる。

そこに立っているのは銀牙。

銀牙はレイラに毎日たくさんの料理を振舞っている。

もちろんそのどれもがおいしい。

（ああ、幸せ、もう死んでもいい。）

レイラがそんなことを考えていたら銀牙が料理を運んでくる。

本日のメニューはガブリブブローズのステーキにスライスサボテン添え、スネークサーモンとブリカブトの刺身盛り合わせ、シモフリトマトとレアオニオンのサラダ、大雪米とオニマツタケの炊き込みごはん、焼き氷樹リングにブレスワイン付きである（注 お酒は二十歳からだがこの世界では未成年でもOK）。

ものすごい量である。

「「いただきます！」」

銀牙とレイラが出逢ってから2週間が過ぎた。

あの事件は団長とルナとソルの暴走として処理された。

その佐びにギルド（ユクモ村のではない）は多額の慰謝料とハンターランクの昇格という措置をとった。

そのおかげで2人ともHRは2となった。

その慰謝料のおかげで、しばらく働かなくてすむので、2人は村でほのぼのとした生活を過ごしているわけである。

2人の仲は村長の妨害（本人無自覚）によって、友人以上、恋人未

満に留まっている。

「「ごちそうさまでした。」」

銀牙は苦笑していた。

10人前ぐらいの量を作ったはずなのにレイラはその8割以上を食べてしまったからである。

あの時のこんがり肉Gもほとんどレイラが食べてしまった。

実は、レイラがユクモ村に来て半年も経つのに、初期装備であったのは食費が半端無いからであったりする。

「毎日ありがとう。酒場の食事より遥かに美味しいよ!」

「真面目にいわれると照れるな・・・文字とかいろいろなことを教わっているし気にするなよ。」

銀牙としては、美味しそうに食べるレイラが見ればそれでいいと思っている。

「この生活にも慣れたしそろそろ狩りに行こうか。それに動かないと太るぞ?」

「ぐはっ!!!」

レイラは大好きな彼の的確な攻撃でダメージを受ける。

「年頃の女の子になにいつてんだああああ!!!」  
事実、2週間で3キロも太ってしまったのである。

「ごめん、ごめんぐっはっ!!!」

レイラの投げた皿が頭にクリティカルヒットする。

「大丈夫?」

さすがにやりすぎたと思ったレイラは心配そうな顔になる。

「ぐっ・・・大丈夫大丈夫。それにレイラは太っても可愛いだろうから大丈夫。」

「!?!」

レイラは銀牙の思わぬ反撃をくらい顔が赤くなる。

銀牙もいつてから恥ずかしくなったのか顔が赤くなる。

そんな平和な日々が続いていた。

それが唐突に終わることになるなんてだれが予想できただろうか？。

「????」

ちっ、500年ぶりに異界からきた者を見たが、まだ若いガキではないか。

アレに選ばれたということは才能はあるのだろう。

動きはそこそよかったが、あれでは古龍クラスには到底及ばないであろう。

アイツ程度では世界を救えない。

アイツは我輩が喰らおう。

そう考えた銀色の\*\*\*\*\*は空高く飛び上がり、まっすぐ飛び立っていった。

それはユクモ村の方向だった。

「銀牙」

はじめは見たことも無い食材ばかりで驚いたが、基本的に調理方法は一緒だった。

金の感覚がわからないのでとりあえず美味しそうな食材を大量に買

い込んだが、レイラは目を丸くしていた。  
かなりの高級食材ばかりだったらしい。

最初は遠慮がちだったがすぐに慣れてくれた様子だった。

レイラは毎日幸せそうな顔をしている。

俺も幸せだ。

今日はレイラと共に工房に向かった。

レイラの薦めで、例の金で防具を作ってもらったからである。

ちなみにガンズはもういないから弟子？みたいなのが店を経営しているらしい。

「はい。出来ましたよ。これがハンターシリーズです。」

俺はレイラとお揃いのハンターシリーズを作ったのである。

素材は全部レイラに貰ったけどな。

早速装備してみる。

「レイラ、似合ってるか？」

「・・・(ポツ)」

しかしレイラはなにも答えない。

「レイラ？」

「ふえ？あつ、ごめんね・・・その・・・すごくかっこよくて見とれちゃって・・・」

「そっか。ありがとう。」

うれしくて顔がほころぶ。

「はふううう・・・」

「ん？レイラ顔が赤いよ？熱でもあるんじゃない・・・」

途中省略

「ギンガのばかあああああ！！！！」

レイラは自宅の方向へ走っていった。

なにがあったかはご想像にお任せします。

「女心ってよくわからないよ・・・はあ・・・」

銀牙はため息をつく。

それを見ていた村人はひたすら苦笑していた。

そのとき、すでにそんな平和な日々がついに崩れようとしていた。

カンカンカン

警鐘が鳴り響いた。

く村人Aく

あれはやばい。

双眼鏡で景色を眺めていたら遙か彼方に銀色のモンスターがいた。

僕は走った。

ギルドのてっぺんにある鐘に向かって。

長い長い階段を登る。

もしあれと戦うことになっても僕は無力。

だからここで力尽きる覚悟で全力で登った。

そして――

カンカンカンカン

辿り着いて警鐘を鳴らすとその場で倒れこんだ。

く銀牙く

警鐘が鳴るのは非常事態。

つまりモンスターが村に向かって来ているということである。



とりあえずギルドに向かった。

ギルドには村長とたくさんのハンターが来ていた。レイラもすでに来ていた。

「銀レウス、しかもサイズからしてG級個体と思われるのがこの村に向かってきています。」

ユクモハンターズギルドの受付嬢のローズがいう。

「「G級の銀レウスだと!?!」」

一気に騒がしくなる。

村長が続ける。

「私が依頼主だ。銀レウスの撃退もしくは討伐。報酬は全員で20000ゼニーだ。それを頭割にする。HR制限はなし。撃退戦ゆえ何人でも参加可能とする!」

「「うおおおおお!!!」」

周りのハンターが雄たけびをあげる。

俺にはなにを言っているかわからない。

そう思っていたらレイラが説明してくれた。

「飛竜の象徴であるリオレウスの希少種を通称銀レウスって呼ぶんだけど、それが村に来たらひとまりもないでしょ。だから本来実力の及ばない人でも参加可能にして、みんなで協力して追い払うの。村長はああ言ってるけどたぶん討伐は無理だからね。それに破格の報酬だよ!」

さっき喧嘩?をしたことはすっかり忘れたらしい。

「なるほど村を守る戦いか。」

金には興味はない(まだまだ慰謝料はあるから)。

俺は戦闘狂ではないが強者と戦ってみたいという思いはある。

それに村を守るということはレイラの大切なものを守るということ。かなり燃えてきたな。

「俺は参加する。レイラは?」

それほど強い相手ならレイラには危険だろう。

「わたしも参加するよ。」

「でもちよっときついだろ・・・」

「わたしは直接は戦わない。自分の実力は分かっているから。それでも村人の避難やこれに乗じてきた雑魚を追い払うことはできるからあ・・・」

自分の非力を認めたことで少し落ち込んでしまったようだ。

「わかった。だから落ちこむなよ。またいつかこんなことがあったら一緒に参加できるようにこれから強くなっていこう？だから暗い顔をしないで。笑顔で俺の隣に立つんだろ？」

「うん！」

そんなやりとりを終え依頼書にサインをする。

レイラのおかげで自分の名前は書けるようになった。

「まずガンナーは飛んでいる目標を狙撃。その後一定範囲に入ってきたら離脱。そこで閃光で迎撃する。そうしたら剣士の出番だ。ガンナーは剣士の邪魔にならないように攻撃してくれ。実力が及ばないものは村の護衛もしくは雑魚の掃討にあたってくれ。では解散！」  
村長がそういうとみんな一斉に準備を始める。

装備を整える者、道具を補充する者、景気づけに酒を飲む者等。

俺は村長に声をかける。

その声に周りにいたハンターも振り返る。

「村長？ちよっといいか？」

「なんだ？」

「俺はガンナーでもいい？」

「「なに！？」」

銀牙はギルドナイトを追っ払うほどの剣士として知られている。みんなが驚くのも無理は無い。

「銃も扱えるからで最初はガンナーで、途中から剣士になろうと思う。」

「なるほど、分かった。じゃあ急いで準備してくれ。」

「ああ。」

実際は召喚するだけだけどな。

「ギンガはボウガンも扱えるの？それとも弓？」

「ボウガンだがハンターのは少し違うよ。」

こう言っておくのが懸命だろう。

ハンターのボウガンなるものを見たが、それはボウガンではなくまるきし銃だけど、機構はまったく違う。

俺のは銃弾の火薬によって発射されるが、こっちの世界のボウガンは予め火薬を銃につめておき、それで火薬が入っていない弾丸を飛ばすのである。

人目を盗んでライフルの＜音越＞と弾丸を召喚する。

そしてギルドをでて村の外に向かう。

すでにほとんどのガンナーは待機していた。

先ほどのやり取りを知らない輩は俺が銃をもってきたことに大変驚いていた。

遙か彼方に小さな点が見える。

レイラの大切なものを守るために俺はそれと戦う。

「待っている銀レウス！」

俺はまだ知らなかった。

ジャギイ程度とは全く違う、大型モンスターの力を・・・

## 第8話 日常に迫る脅威（後書き）

銀レウスです。3rdでは弱くなっていますが、2ndGではめんどくさかったですよね・・・無駄に硬いですし、塔を登らなきゃいけないですし・・・

果たして銀牙は勝てるのでしょうか？

感想お待ちしております

## 第9話 激動する運命。銀レウス迎撃戦！（前書き）

初めての大型モンスターが銀レウスとかW  
間にアオアシラでも挟みたかったな・・・

## 第9話 激動する運命。銀レウス迎撃戦！

（銀牙）

スコープで覗いた先にはヤツがいた。

「あれが銀レウスか・・・」

銀の鎧を纏ったモンスターが村に向かって飛んできている。そもそもリオレウスどころか大型モンスターを始めて見た。

レイラいわく、最大3連続で炎のブレスを吐いたり、強靱な脚力で突進してきたり、毒がある尻尾を体ごと回転させたり、バインドボイスという轟音で行動不能にさせるとりするらしい。

炎のブレスとかファンタジーな・・・

たしかにこの世界に来たとき、メ○ゾーマとかできるならいいなと思ったがまさかモンスターが使うとは・・・

ハンターは俺を除いてガンナーが4人、剣士が10人である。（指揮をするために村長もいる。）

まだジャギィにしか遭ったことがないからいまいち勝てるのかどうかわからんな・・・（ガーグアもアイルーもモンスターとして見てねえよ）

ん？

銀レウスは相当近づいてきてるのになぜみんな警戒しないんだ？目測で500メートルといったところか。

「おい、もうかなり近くまできてるぞ？」

すると壮年のハンターが、

「なにをいう？あんなところまで届くわけないだろ？」  
・・・なるほど。

ボウガンや弓は音越より遥かに射程距離が短いらしい。

まあいいや。

「くらえ！銀レウス！」

ダーーーーン

ギャア！？

俺の狙撃は甲殻を弾き飛ばし、怯ませた。

「「「なあ！！！！」」」

周りのハンターが驚いているが無視して次々と銃弾を発射。

所詮ただの狙撃なので必殺技とか叫べないのが残念。

結構必殺技を叫ぶのが好きなんだな。

なんかかっこいいだろ！

ギャアーーーーー！！！！

同じ箇所に連続で狙撃を受け、肉を露出し、空の王者は墜落した。

「「「！！！！」」」

みな、こんなにすぐに落ちるとは思ってもいなかったので驚いた。

しかし、俺のほかには誰も攻撃できる距離じゃない。

ギャオオオオオオオ！！！！

すぐに銀レウスは立ち上がり怒り、バインドボイスを放った。

そして俺の方に向かってブレスを放った。

「はっ、あんな距離で当たるわけ無いだろ。」  
近くにいた若いガンナーが笑っている。  
だが――

俺の直感が告げている。

やばいと。

俺はすぐにその場を去る。

そして――

先ほど笑っていた若いハンターはブレスをモロにくらい、消し炭となった。

さらに炎は拡散し、周りのハンターも火傷を負う。

「「?!?!?!?!?!」」

戦慄が走った。

銀牙はこれが銀レウスというものだと思っていたが、他のハンターはその異様に、息を呑むばかりであった。

「? ? ? ? ?」

なるほど少しはやるようだな。

我輩を撃墜させるとは・・・

さすがは異世界の武器ということか・・・

500年前も異世界の武器が活躍して、ヤツを退けたと聞く。



しかしさすがに肉を抉られたのは不快だな。

見せてやろう！

通常体とは遥かに違う、我輩等の圧倒的な力を！

（銀牙）

銀レウスはブレスを吐き終わると怒りに任せて猛突進してきた。  
3発打ち込んだところで避難する。

そこで閃光玉の眩しい光が辺りを包んだ。  
当初の予定では飛んでいる銀レウスを落とす予定だったがしかたがない。

閃光に目が眩み、怯んだ銀レウスを剣士が攻撃するが――――

ガキンガキン

辺りから同じ音が連続して響く。

「「「なあ！！！」」」

予想外の事態ばかりである。

銀牙はまだ退避したままだが、他の剣士の攻撃は皆、弾かれてしまったのだ。

そのまま、銀レウスは尻尾を回転させ、

ビュン

という風を切る音をだし、ハンターをなぎ払った。  
その後できた隙に俺は雷切で斬りかかった。  
が、

ガキン

「!？」

なんと雷切までもが弾かれてしまったのだ。

「やばい！」

そこに銀レウスはブレスをし吐いてきた。

それを回避しようとする。

しかし、吐かれたブレスは5つ。

「ぐはっ！」

直撃こそしなかったが爆風でおもいきり飛ばされる。

「聞いたことねえぞあんなの!？」

ブレスを5つ吐いたのをみてだれかが言う。

こいつはなにか特別なのか？

そう考えたとき頭のなかで声がした。

『正解だ。異世界の者よ。』

「!？」

誰かが頭の中に直接語りかけてきている。

そんな感覚だった。

『我輩の名はシルヴァー。世界を管理するくアドミニスレイターズ

＞のメンバーだ』

こいつはなにを言っている!？

『貴様程度では世界を救えない。貴様を殺して次の救世主を待つこ

とにする!』

ねらいは俺か!？

「お前がむかつくやつだということとは分かった。」

『ハハハ威勢はいいな。よかろう、今すぐにでも葬り去ってやろう。』

そういうと銀レウス改めシルヴァーは1歩下がりブレスを放つ。

銀牙はそれを横に避けようとした。

しかし、放たれたブレスは10個だった。  
しかも360°回転していき、周囲を焼き尽くした。  
銀牙は肉体を強化するが、それをモロにくらった。

「ぐあああああ」

肉が焼ける臭いがした。

俺は直前で皮膚強化をし、表面が焦げたのと飛ばされたときの打撲だけですんだ。

しかし他のハンター達は・・・跡形もなくなっていた。消し炭さえ残っていなかった。

残りのハンターは俺を除いてガンナー3人、剣士5人になっていた。

『無駄な殺生はよしたい。他の者は引かせる。』

「ああ・・・」

こいつの狙いは俺らしいならば俺一人で戦うならば村にはこないはずだ。

「俺が囚になる。いったん引けえええええ！」

全員力量の差がわかったのか、素直に村に戻っていった。

「気をつけろよ。ギンガ君！」

最後に村長が叫んでいるのが聞こえた。

『先ほどの攻撃をしのいだとは……お前はなにものだ?』

「俺の名は銀牙不知火。なぜ俺が異世界から来たことを知っていた？  
なんで俺を狙う？」

『くつくつく。お前を呼んだのが我輩等だからだ！そしてお前を狙うのは期待はずれだからだ！』

「よくわかんねえな・・・」

『貴様が助かる道は1つ！我輩を殺すことだ！』

「シンプルだな。いいぜ。勝ったらいろいろ聞かせてもらおう！」  
『よからう！』

ガキン

俺は雷切で斬りかかったがまたもや弾かれる。

いったん納刀し隙をうかがう。

シルヴァーが尻尾でなぎ払おうとするのを脚力強化して上に飛んで回避する。

そしてそのまま腕力強化して雷切を突き立てる。

狙いは翼膜。

雷切はみごとにそれを切り裂いた。

『グアアアよくも！』

シルヴァーは先ほどの全方位ブレスを放とうとする。

俺はそれを足元に潜り込むことで回避した。

「不知火流抜刀術＜一閃突＞」

音越で弾き飛ばした甲殻の隙間に雷切をねじ込んだ。

それは見事に刺さった。

しかしその衝撃でシルヴァーがのけぞり、雷切が刺さったまま手元から離れてしまった。

『フハハ武器を放すとは愚か者め！』

なんかほざいてるけど無視する。

しかたがないので雷切の代わりに新たな刀を召喚する。

『なんだそれは！！！！』

なんか驚いているけど無視する。

召喚したのは黒い鞘に黒の刀身、禍々しい雰囲気の妖刀＜魔刃＞と  
白い鞘と白の刀身、神々しい雰囲気の宝刀＜輝刃＞。

見た目はまったく同じだが雰囲気は正反対である双子の刀である。

『おまえは特異な力を持つようだな。おもしろい！もっと見せてみよう！』

シルヴァーは猛突進してきた。

俺はそれを軽く避け、去っていく尻尾に2本を投擲した。

「＜双絶突＞」

黒と白の2つの刀は同じ箇所突き刺さり、尻尾をちぎり飛ばした。

『グアアアアア我輩の尻尾を切り落とすだと？なんだその刀は！？』

「こいつ等はなあ、双子の鍛冶師の作品らしくてなあ、兄が弟を越えるために魔刃を闇の力で作り、弟が兄を救うために輝刃を神の力で作っただろうぜ？それでこいつ等はお互いに反応して、お互いを超えようとして不思議な力が湧いて来るらしいぜ？」

『妖刀と宝刀の2振りか。すばらしい！が、それも失ってしまったようだな？どうするのだ？』

「もう1本新たな刀を召喚する。」

召喚されたのはおよそ2メートルもある紫色の禍々しい妖刀、大薙刀＜阿修羅＞。

『な、なんだそれは・・・妖刀というレベルを超えている・・・人間に扱えるのか？貴様は何者だ？』

「知るかあああああ！！奥義＜修羅の咆哮＞」

阿修羅は手にしたものに殺人衝動を持たせる。

しかし、銀牙は修行よりそれを克服している。

だからすべての妖刀を扱える。（トラウマスイッチが入らない限り）

この剣は常時細振動を起こしている。

それを攻撃の瞬間増幅させ内部破壊を行う。

それをさらに強化したのが＜修羅の咆哮＞である。

ズドーーーーー

シルヴァーは体内を破壊され、その場に崩れ落ちた。

## 第9話 激動する運命。銀レウス迎撃戦！（後書き）

存ぜぬ方への説明。フロンティアには特異個体なる通常と違う行動をするモンスターがいます。しかし銀レウスの特異個体はここまでチートじゃありませんWシルヴァーが異常です。

次回銀牙が異世界にきた理由が分かります。

感想よろしくお願いします。

## 第10話 救世主となる少年と変わらない想いを持つ少女（前書き）

今回は戦闘なしのシリアス&コメディです。



## 第10話 救世主となる少年と変わらない想いを持つ少女

銀牙はブレスを正面から受け、その後常時人間道を発動。

音越と弾丸、雷切より上等な刀、妖刀2本、宝刀1本を召喚し、奥義を使用。

実は銀牙が雷切を愛用していたのは、一番最適なスタミナ配分で戦いを行えるからである。

妖刀や宝刀など過ぎたる力は無駄にスタミナを消費してしまう。

扱えるからといってリスクがないわけではないのだ。

例えば阿修羅は内部破壊のための衝撃の反動を腕で吸収しなければならぬ。

よって、銀牙は3週間は起き上がれないほどのダメージとスタミナ切れに陥っていた。

しかしまだ倒れることはできない。

目の前にいる者からすべての情報を聞き出すまでは……

くシルヴァーく

くくくく

まさか我輩が人間1人に負けるとは。

ジャギイ戦を見て力量不足と判断したが、あの時は完全に手加減していたのだな。

いいだろう。

この男に世界の命運を託そう！

「銀牙」

「すべて話すよな？」

俺は目の前に倒れているシルヴァーに話しかける。

『ああ、よからう。』

シルヴァーは続けた。

『お前を異世界から呼んだのは我輩だ。』

「なぜだ？」

『何100年に一度現れる世界を滅ぼすモンスター達を倒すためだ。』

「なぜ俺なんだ？」

『それは知らない。我輩の意味ではない。あのネックレスの意味だ。』

「あれはなんなんだ？」

『我輩等のリーダーが我輩の甲殻の一部から作ったものだ。』

「お前は何者なんだ？」

『銀レウスにして銀レウスにあらず、人竜という人の血が混じっているモンスターだ。おかげで知能が高く、特別な攻撃ができる。』

「・・・」

普通のハンターじゃ手も足もでないわけか。

『遠い昔、人とモンスターは共生していたそうだ。その時、人とモンスターが交わったらしい。そのとき竜人と人竜が生まれた。人竜には人の血はわずかししか流れていないが、竜人は人の血の方が濃いやつらのことだ。』

「アドなんたらっていうのは？」

『アドミニスレイターズ。人竜の集まりだ。この世界がちゃんと廻るように管理するのだ。草食竜が増えすぎたら数を減らすとかだな。我輩はその幹部だ。』

「・・・なんで俺を殺そうとしたんだ？」

『1体の人竜が呼べる人間は1人までだからだ。』

「俺を見限ったということか。」

『すまん・・・』

シルヴァーが頭を下げる。

『すべての人竜が友好的とは限らない。気をつけろ。』

「お前、自分が友好的だと思っているのか？」

『基本的にみなモンスターだ。好戦的なやつもいれば残虐なやつもいる。人語を理解してもしゃべれないものもある。』

「ふーん・・・」

『最後に、数年以内に、世界を滅ぼすモンスター黒龍<ミラボレアス>は現れる。今のままではまだ勝てないだろう。それまでにこの世界を廻り、やつを倒すために強くなれ。』

「わかった。ありがとな。」

そういつて、その場を立ち去ろうとする。

『待て！』

「ん？」

シルヴァーを見る。

『我輩は貴様を殺そうとして負けたのだ。殺せ！』

「・・・」

やっぱりか。

遺言みたいに言ってたから薄々わかっていたけどな。

『情けは必要ない。この世界は弱肉強食。我輩の死体を使って、装備でも作ればよい。』

「やだね。俺は戦意のないものは殺さないからね。」

『なんだと？我輩の誇りを踏みにじる気か？』

「俺が勝ったんだ。俺の自由だろう？」

『ぬぐううう・・・』

言い返せないようだ。

「じゃ、またいつか会えーー」

そこまで言うってから俺は知りたいことが分かった安堵感からか、意識を失いその場に倒れこんだ。

村の警備をしていた1人の少女は迎撃隊が村に退避してきたので、事情を聞き、周囲の制止を振り切り、想い人のもとへと向かい、そこで彼女は化け物同士の戦いをすべて見て、聞いてしまった・・・

く???く

まさかシルに認められるどころか勝利するとはねえ・・・

1人目がいきなり大当たりだとはうれしいかぎりだわ。

そろそろ私のもとにも来ないかなあ。

500年前に作ってもらった金のネックレスはいまはどこにいったのかなあ。

くレイラく

わたしの想い人は普通の人間ではなかった。  
さらに、この世界の人間でもなかった。

しかしそう考えるとすべての説明がつく。

見たことも無い容姿、武器、防具、道具持っていて、ハンターの存在さえも知らなかったという無知っぷり。

でも、それがなに？

そんなのどうでもいいじゃない。

なのにギンガは嘘をついてまでして隠した。

最初はしやうがなかったかもしれないけど、この2週間の間にギンガは話してくれなかった。

許せない。

帰ったら逃げられないように縄で縛ってここでは言えないようなことをしてしまおうか。

そんなことを考えていると、ギンガは話している途中で倒れた。

「ギンガっ！！！」

思わず隠れていた岩陰から飛び出してしまった。

シルヴァーがこっちに気づく。

「わたしはギンガの友達です。戦意はないです。」

そう言って朱雀を地面に置いた。

それを聞くとシルヴァーはギンガの心配は不要だと理解したのか、ゆっくり頷いた。

そして今まで倒れていたシルヴァーはふらつきながらもなんとか立ち直り、そのまま大空に向かって飛び去っていった。

わたしは気絶しているギンガに駆け寄り、そっと抱きしめる。

顔色はあまりよくないが温かい。

確かにギンガが異世界の住人であることを隠していたことや、嘘をついていたことは許せない。

でも、わたしの想いは変わらない。

わたしはこんなこともあるかと、大金をはたいてくいにしえの秘薬を購入していた。

どんな怪我や疲労でもたちまち回復するという薬である。  
それをギンガに飲ませようとするが、気絶しているので上手くいかない。

しかたがないと自分に言い聞かせながら、わたしは訓練学校で習った最後の手段をとることにする。

わたしはいにしえの秘薬を少しだけ口に含んだ。

そして――――

ギンガの唇に自分の唇を重ねあわせた。

そして上手く舌を使い、口の中の液体を流し込んだ。

「・・・(ポツ)」

顔が火照っている。

この薬を使うときはギンガはおそらく気絶しているだろう。

(そうしたら口移ししかないなあ。エヘヘ♪)

そう考えながら購入した。

たしかに予想どうりなのだが納得がいかない。

やはり、初めてはギンガの方からからしてもらいたかったなあ。

そう考えながら、また少量のいにしえの秘薬を口に含む。

またゆっくり口移しで与える。

それを繰り返すとギンガの顔色はみるみるよくなっていった。

そして最後の一口を与えるとき、銀牙は目覚めた。

それを――――

「あっレイむぐっ!!!」

無理矢理押さえつけ、唇を奪う。

ギンガの目が見開いた。

そして最後の一口を流し込んだ。

流し込み終わってもしばらくそのままだった。

実際は数秒だろうがわたしにとっては永遠のように感じられた。

ドサッ

もちろん意識があるときにキスをされたのは初めてなので銀牙は驚きとうれしさと恥ずかしさのあまり笑顔で意識を失った。

その笑顔はもちろんレイラのハートを射抜き、辺りは先ほどの戦闘が嘘のように、桃色の空気が広がっていた。

## 第10話 救世主となる少年と変わらない想いを持つ少女（後書き）

アドミニスレイターズ。管理者達という意味です。というかそのつもりです。

レイラはすべてを知ってしまいましたがそれでも銀牙に対する想いは変わりませんね。

話の流れから分かるかもしれませんが今後はユクモ村をでて、旅を始めるつもりです。

感想お待ちしております。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1702w/>

---

モンスターハンター～銀の牙の運命～

2011年10月9日14時52分発行